

富士宮市文化財調査報告書第27集

丸ヶ谷戸遺跡Ⅱ

2001

富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書第27集

丸ヶ谷戸遺跡Ⅱ

2001

富士宮市教育委員会

序

富士山の西南麓に広がる富士宮市は、その起伏に富んだ地形が大きく作用して、豊かな自然環境を醸し出しています。本市には浅間大社境内の湧玉池に代表される湧水地が点在し、市域の中央には富士山をその源とする潤井川が南流しています。これらから得られる豊富な水は、古来より人々の生活の根底をなすのものとして重要であり、本市に遺跡が数多く築かれた要因ともなっています。現在では、今の市街地周辺を中心に200箇所以上の遺跡が確認されています。

それらの遺跡の中で、古墳時代の始まりにあたる3～4世紀の遺跡は、特筆するものが多いことも本市の歴史を考える上で大きな特徴として挙げることができます。これまでに星山の月の輪平遺跡、黒田の滝戸遺跡・泉遺跡、小泉の上石敷遺跡など当時の様子を伝える遺跡が調査されています。

そして、このころの歴史の変動を如実に伝える遺跡として、1991年に調査された丸ヶ谷戸遺跡の前方後方型周溝墓は、極めて重要な発見でした。それは、当地方を治めた首長の墓として捉えることができるものであり、列島規模でその構造が大きく変化した古墳時代社会の一端を的確に物語るものがありました。

その前方後方型周溝墓の発見からほぼ10年の時を経て、今回再び調査された丸ヶ谷戸遺跡では、前方後方型周溝墓と同じ時代のムラの跡が発見されるなど多くの成果を上げ、遺跡の具体的な姿が明らかになり、遺跡の評価はさらに高まると思われます。

このたび、これらの成果を富士宮市文化財調査報告書第27集として刊行することとなりました。本書が学術資料はもとより教育資料として幅広く活用されると期待するものです。

最後に、現地での発掘調査から報告書の刊行まで、格別のご配慮を賜りました地権者の井出喜江氏や事業を担当された㈱クラストをはじめとした関係各位の皆様、発掘調査に際し多大なご協力をいただいた地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成13年10月31日

富士宮市教育委員会
教育長 藤井國利

例　　言

1. 本書は富士宮市大岩字丸谷戸749番地の4、750番地に所在する「丸ヶ谷戸遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、共同住宅建設事業に伴うもので、平成12年4月20日に事業者である井出喜江氏の依頼を受けて富士宮市教育委員会が実施した。
3. 調査は平成12年10月10日から同年12月7日まで実施され、継続して整理作業、報告書作成を行ない、本書の刊行によりすべての事業を完了した。
4. 発掘調査は富士宮市教育委員会文化課学芸員渡井英裕、同嘱託員小野田晶が担当して行った。
5. 本書の執筆と編集は渡井がII、IV、VI章を担当し、小野田がI、III章を担当した。V章は分担して行ない、その文責は文末に示した。
6. 発掘調査および本書の編集、印刷、出版に関する事務は富士宮市教育委員会文化課文化財係が担当した。
7. 本報告による出土品および記録図面、写真などは一括して富士宮市教育委員会で保管し、活用を図るものとする。

凡　　例

1. 掘図中の高度は海拔高度を示し、単位はメートル(m)とする。
2. 遺構実測図中の方位は真北を示す。
3. 第5図で用いた地形図は、明治22年に大日本帝国陸地測量部が作成した地図を複製し、使用している。
4. 土層と土器の色調は、『新版 標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局)で補って判断している。
5. 遺物観察表の()は、推定値を表す。法量の単位はセンチメートル(cm)とする。
6. 本書で用いる遺構の標示は以下のとおりとする。

S B………住居、建物　　S D………溝　　S K………土坑

目 次

Iはじめに	1
1. 調査の経過	5
2. 調査の概要	5
II環境	7
1. 自然環境	7
2. 歴史的環境	9
3. 遺跡の層序	14
III遺構	15
1. 古墳時代	15
2. 中近世以降	28
IV遺物	31
Vまとめにかえて	41
1. 出出土器の編年的位置	41
2. S B 6 の形態	49
3. 集落の変遷	52
VIおわりに	56
付録	58
報告書抄録	63

挿図目次

第1図 調査区位置図(1)	2	第17図 S D 1 実測図	25
第2図 調査区位置図(2)	3	第18図 調査区全体図(古墳時代)	26
第3図 調査区全体図	4	第19図 調査区全体図(中近世以降)	27
第4図 富士宮市南部の地質	6	第20図 S K 実測図	29
第5図 遺跡位置図1889年	8	第21図 S K · S D 2 実測図	30
第6図 周辺の遺跡分布図	10	第22図 S B 1 遺物出土状況	32
第7図 土器実測図	12	第23図 S B 1 出土遺物	33
第8図 層序断面図	14	第24図 S B 1 No.6 出土状況	33
第9図 S B 位置図	15	第25図 S B 1 No.7 出土状況	34
第10図 S B 1 実測図	16	第26図 S B 2 出土遺物	34
第11図 S B 1 · S B 2 爐	17	第27図 S B 2 No.12 · No.14 出土状況	35
第12図 S B 2 実測図	18	第28図 S B 3 出土土器	35
第13図 S B 2 実測図(堀り方)	19	第29図 S B 5 遺物出土状況	36
第14図 S B 3 · 4 実測図	21	第30図 S B 5 出土遺物	37
第15図 S B 5 実測図	22	第31図 出土土器	38
第16図 S B 6 実測図	24	第32図 出土遺物	38

第33図	台の変化	44
第34図	短頸壺の変化とその共伴土器	45
第35図	短頸壺の型式	46
第36図	富士宮市内掘立柱建物跡集成	50
第37図	集落の変遷	53
第38図	丸ヶ谷戸遺跡第1次調査	56
第39図	第1次調査 前方後方形周溝墓	58
第40図	第1次調査 出土土器実測図①	59
第41図	第1次調査 出土土器実測図②	60
第42図	第1次調査 出土土器実測図③	61
第43図	第1次調査 出土土器実測図④	62

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧	9
第2表	S K 計測表	28
第3表	土器観察表①	39
第4表	土器観察表②	39
第5表	土器観察表③	40

写 真 図 版

- 図版1 遺跡遠景 A…遺跡遠景（南から）／ B…調査地区遠景（東から）
- 図版2 調査区全景 A…調査区西側全景（東から）／ B…調査区東側全景（南西から）
- 図版3 遺構 A…竪穴と溝（南西から）／ B…SB1（南から）
- 図版4 遺構と遺物 A…SB1掘り方（南から）／
B…SB1遺物出土状況（南から）／
C…SB1No.1出土状況（南から）
- 図版5 遺構 A…SB2（南から）／ B…SB2掘り方（南から）／
C…SB2炉跡（南西から）
- 図版6 遺構と遺物 A…SB2遺物出土状況（南から）／
B…SB2No.14出土状況（南から）／
C…SB2No.12出土状況（南から）
- 図版7 遺構 A…SB3、SB4掘り方（南西から）／ B…SB6（西から）
- 図版8 遺構 A…SB5とSD1（東から）／ B…SB5（東から）
- 図版9 遺構 A…SD1（東から）／ B…SD1土層（西から）
- 図版10 遺構 A…SD1（西から）／ B…SD2（東から）
- 図版11 遺構 A…SK4、SK6、SK7、SK8（東から）／
B…SK11、SK12、SK13（南から）
- 図版12 遺物SB1出土土器 A…No.1／ B…No.6／ C…No.7
- 図版13 遺物SB2、SB5出土遺物他
A…No.12／ B…No.14／ C…No.18／ D…No.24、No.34、No.35／
E…No.20／ F…No.25
- 図版14 A…SB1No.6出土状況（南から）／
B…SB5No.20出土状況（東から）

第Ⅰ章 はじめに

丸ヶ谷戸遺跡に対する発掘調査は、民間事業者の住宅建設に伴う事前調査として、平成12年7月11日から14日まで実施した確認調査の結果を受けて平成12年10月10日から開始したものである。

丸ヶ谷戸遺跡は、大正時代に創立された「岳南考古学会」のメンバーである佐野要吉氏らの遺跡踏査で発見された遺跡である(佐野1929)。その発見は昭和5年に刊行された『静岡縣史 第一卷』で紹介され広く知られるようになり、富士宮市でも比較的古くからその存在が明らかとなっていた著名な遺跡である。遺跡は、縄文時代と古墳時代からなる複合遺跡として登録されているが、標高の高い北側において縄文土器の分布が目立つようでもある。因みに、昭和6年刊行の『静岡縣史 第二卷』では縄文時代の大型磨製石斧が紹介されている。

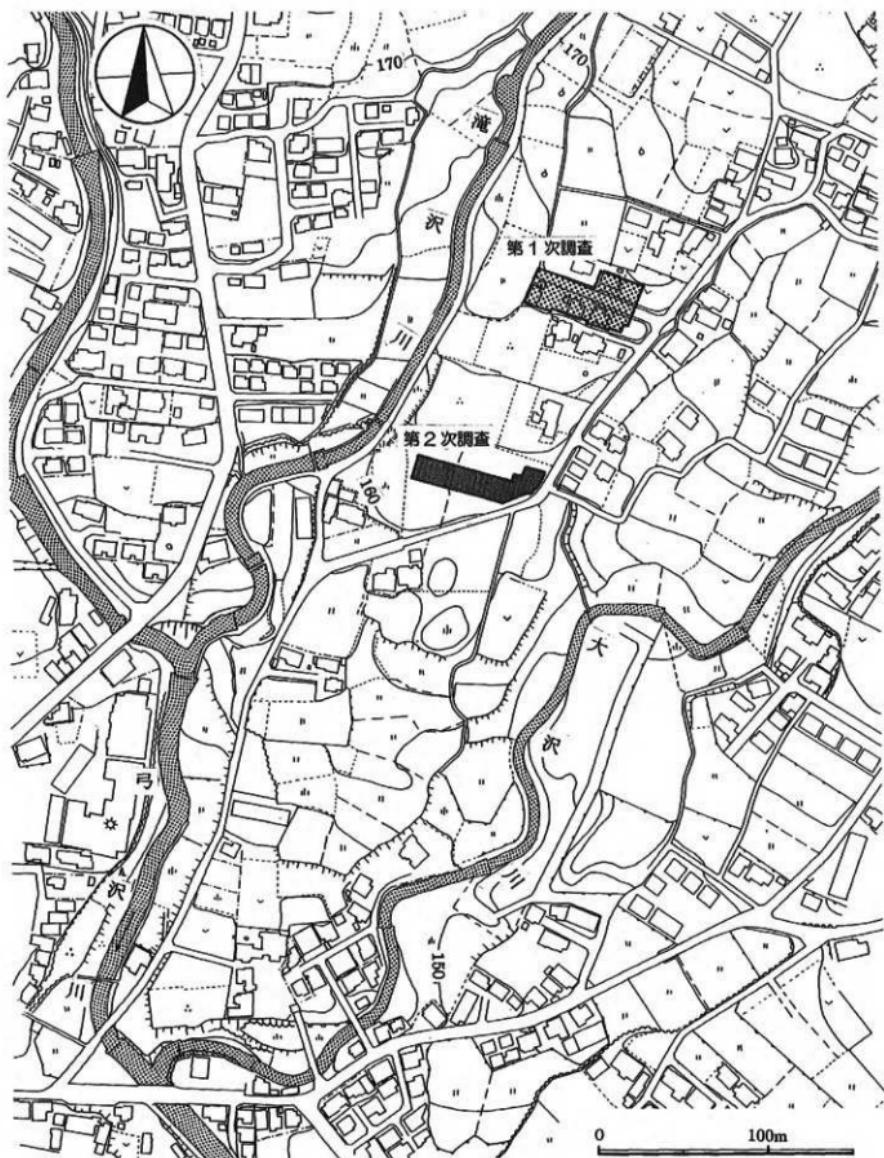
今回の調査は、丸ヶ谷戸遺跡の最も南端部に近い標高の低い部分に対して実施したもので、縄文時代よりも古墳時代の集落が主体的な分布を示す地点であった。この地区における発掘調査は、今回が2回目で、平成元年12月から3月まで今回の調査地点から100メートルほど北側の地点を第1回目の調査として行なっている(第1・2図)。

この第1次調査では、26メートルの全長を測る前方後方形周溝墓(前方後方形墳丘墓)が検出され、静岡県内で初の発見として話題となった。それは、この10年間同じような遺構の発見が、まだ静岡県内で報告されていないことから、いかに重要な発見であったかが知られるものとなっている。また、同じ調査で発見された方形周溝墓や竪穴住居跡も今まで富士宮市内で発見例がなかった大規模のものであり、その形態も特徴的なものであった。方形周溝墓は溝の隅が大きく拡張される特異な形態であり、全国的にもその類例がないものである。竪穴住居跡は、一辺8.5メートルなどを測るこの地方では最大規模のもので、その平面の形が整った方形を示すものであった。

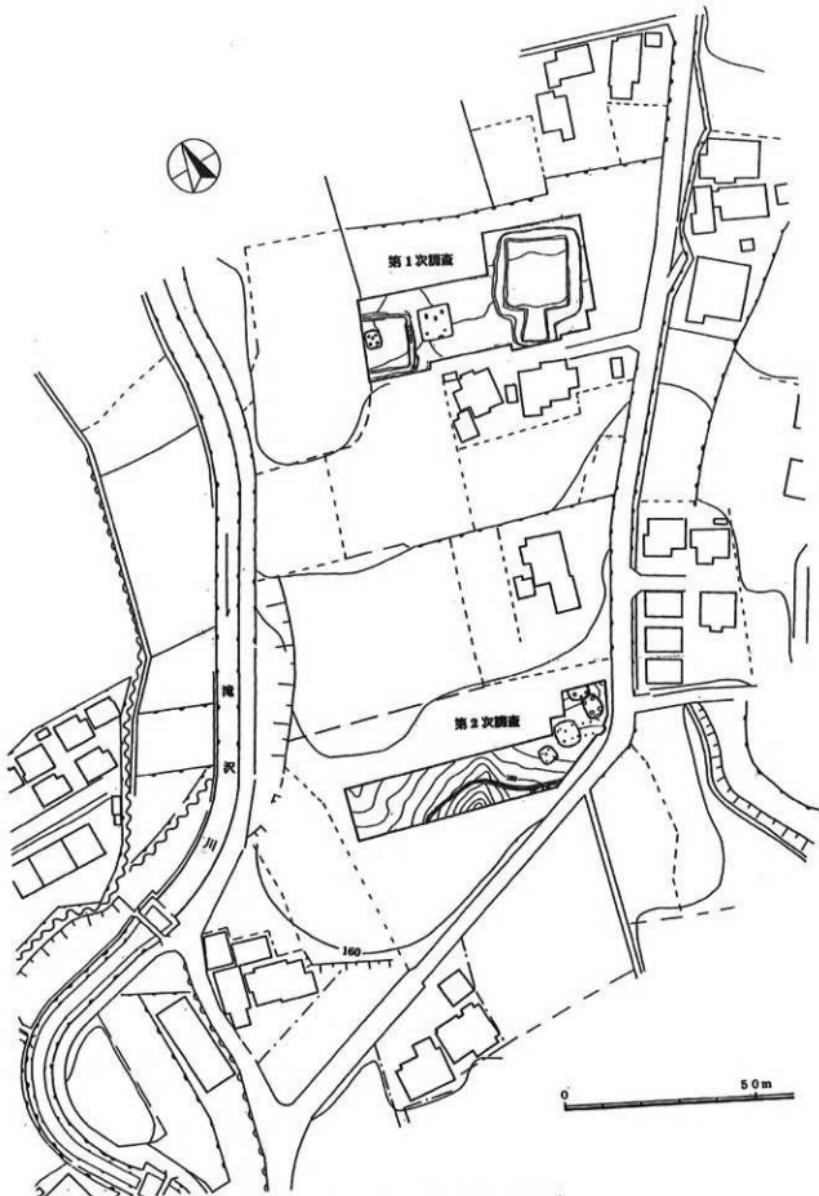
さらに、第1次の調査では、これらの遺構に伴って多量の土器が出土している。それらの多くは、畿内、北陸、東海西部地域などをその「ふるさと」とする外来系土器であり、広域的な土器の交流の存在を窺わせる土器群で構成されていた。この外来系土器の動向は、古墳時代の始まりを規定する古墳出現期の全国的な土器交流に呼応するものであり、前方後円墳成立の基盤として全列島的規模で展開した地域間交流の中で捉えることができる歴史的事象(加納1991)である。そして、その広域的な外来系土器群の出現を時代区分の根拠として、弥生時代と古墳時代を分けようとするわけである。その中で、この丸ヶ谷戸遺跡では、前方後方形周溝墓と呼ばれる墓あるいはその出土土器などから、時代が弥生時代から古墳時代に移り変わるその過渡期を具体的な文物を通じて垣間見ることができるわけである。このように、古墳時代の始まりを考える上で、極めて重要な遺跡として、この丸ヶ谷戸遺跡は大きな評価を受けているのである。

文献：佐野要吉1929『第一輯 有史以前の富士根村』

加納俊介1991「4 東海」『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』雄山閣

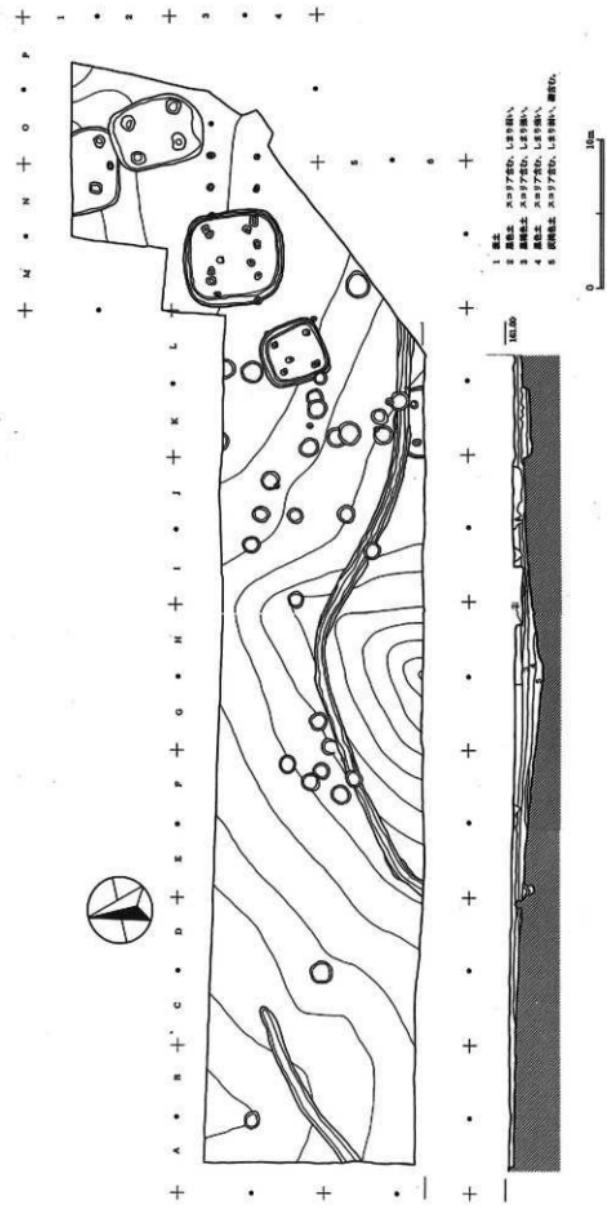


第1図 調査区位置図(1)



第2図 調査区位置図（2）

第3図 調査区全体図



1. 調査の経過

調査区のこれまでの現状は茶畠として利用されており、以前より農地開墾が積極的に行なわれてきた地域であり、また本来の地形の起伏が大きいため、調査区の中央を分断する谷を挟んで西半分は掘削により地山とされる白色化した礫層（古富士泥流上扇状地堆積物）が耕作土直下より露出していたのに対し、東半分は弥生時代以降の遺構確認面である大沢ラビリ層が確認できた。表土の除去作業は重機（バックホウ）で行ない、遺構を損なわないよう若干表土を残しつつ、調査区全体を掘削した。

発掘調査はまず大沢ラビリ層の面的拡がりを確認できる調査区東側で行なわれた。人員による表土の削平が2000年10月10日より開始されると、SB1とSB2が相次いで検出され、SD1の一部が確認された。また、中近世の遺構とみられる円形土坑が調査区内のいたる箇所で検出され、これらの土坑は他遺構と重複しない限り順次処理していった。

調査区北側のやや高地となる箇所では、遺構の確認面まで掘削が及んでしまっているため残存状況が悪く、結果的に重複する住居跡であったことから確認が難儀であった。

調査区中央部の谷となる箇所では表土の堆積量が多いため、再び重機による排除を行ない、人員作業の省力化と効率化を計った。

調査区西側では、SD2など近世以降の遺構が数基確認されたのみで特に慎重な工程を必要としなかった。

現場では作業の大詰めをむかえた11月21日に前日より降り続いた豪雨により、調査区が浸水してしまい作業が中断された以外は、各遺構の調査は順調に行なわれ、2000年12月7日に現場での調査を完了した。

資料の整理と報告書の作成は富士宮市教育委員会文化課埋蔵文化財整理事務所において行ない、本報告書の刊行を以って終了している。

2. 調査の概要

調査は5×5メートルのグリッドを設定して実施した（第3図）。グリッドはN-12° - Eラインを南北軸に直交させ、調査区を西から東へアルファベット順、北から南へ算用数字順とするなどを基本として、その交点によって、A-1、B-1などと呼称することにした。

なお、本発掘調査は以下の体制で実施された。

【調査体制】

調査主体者 富士宮市教育委員会教育長 藤井 國利

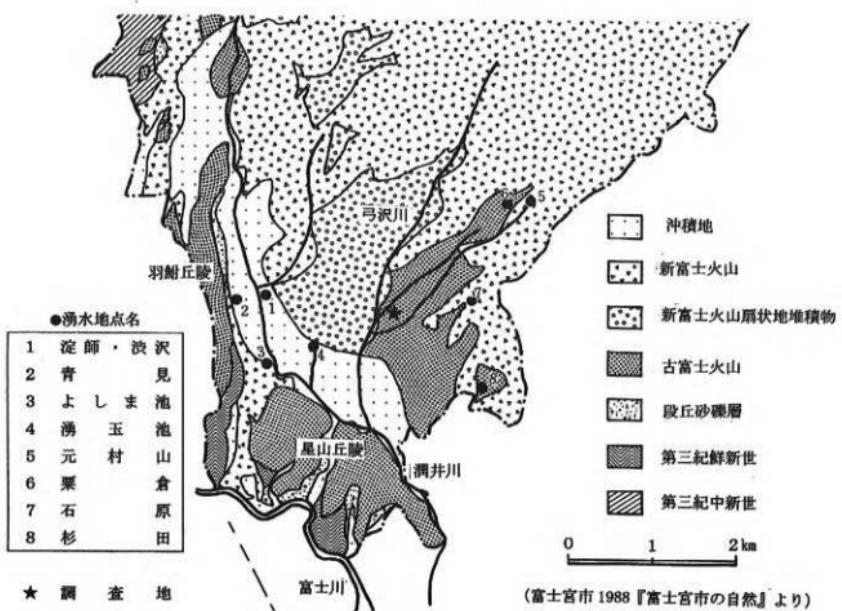
調査担当者 富士宮市教育委員会文化課学芸員 渡井 英誉

富士宮市教育委員会文化課嘱託員 小野田 晶

現場作業員 望月 秀雄、天野 秀男、勝俣 利雄、田中 敏夫、佐藤 法夫、
村野 立巳、堤 健一、古郡 善明、田中 稔、依田 佐太郎、

阿部 稔男、渡辺 修子、山崎 里恵、渡辺 成子

整理作業員 佐野 求女、渡辺 麻里、佐藤 節子



第4図 富士宮市南部の地質

第Ⅱ章 環 境

1. 自然環境

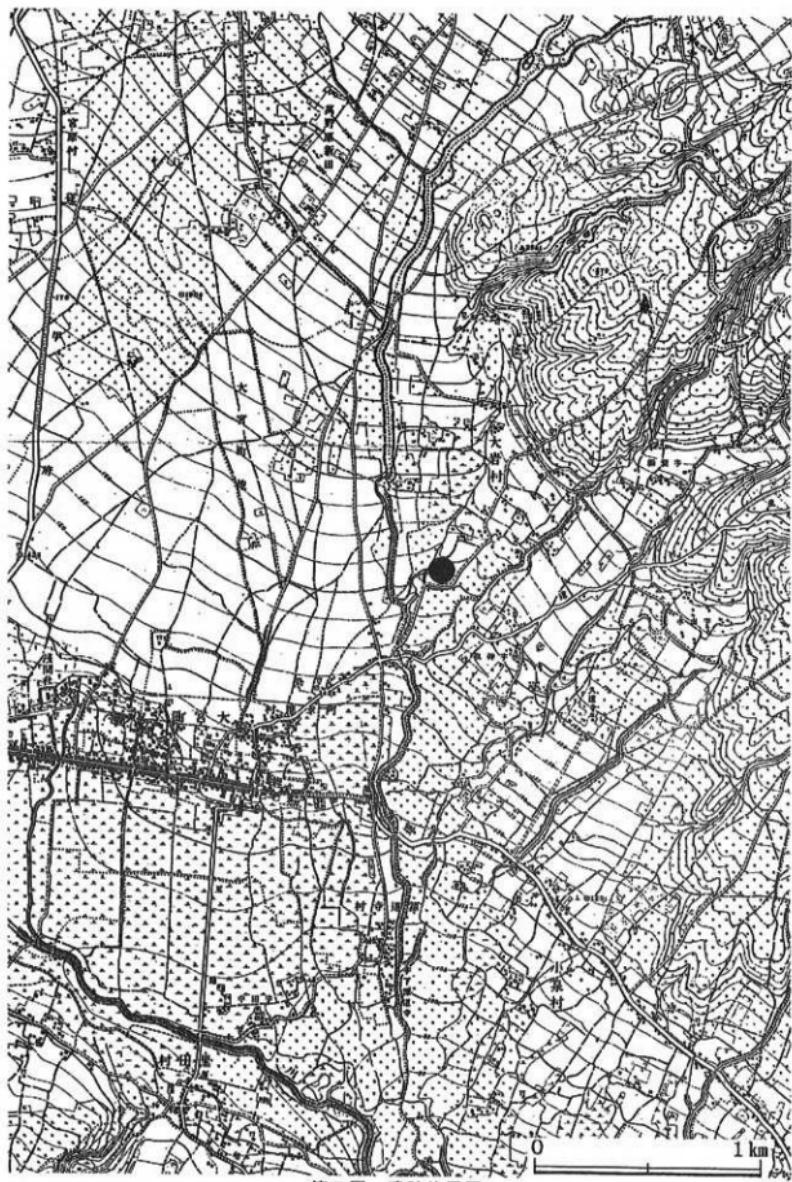
丸ヶ谷戸遺跡は富士宮市大岩字丸ヶ谷戸の一帯に展開する遺跡である。今回の発掘調査は、その中の大岩字丸ヶ谷戸749番7及び750番1において実施したものである。

富士宮市は富士山西南麓を中心とした特有の山間地にあり、富士山の影響を直接受ける自然環境を示すが、それは標高の違う各々の場所で大きく様子を違えている(第4図)。その上市内の中央を南下する潤井川を挟んで、西側には古富士火山の末端部に当たる星山・羽鮈丘陵が独立丘陵として横たわっており、その状況をさらに複雑にしている。この丸ヶ谷戸遺跡は、富士山側の斜面に築かれた遺跡であり、対して滝戸遺跡や月の輪遺跡群は星山丘陵に築かれた遺跡である。

丸ヶ谷戸遺跡は、このように富士山側の連続して続く擁壇状の丘陵の一つにあり、標高161メートルの高さを測る(第5図)。この高さは比高差の極めて大きな當市における遺跡の面的な分布域のほぼ中ほどに当たる場所で、縄文時代の遺跡と複合することが多い地点でもある。また、この丘陵の大きな特徴は、その東側を弓沢川・滝沢川に、西側を大沢川に開析されることにより傾斜地形に合わせて縱に長く、幅の比較的狭い形状を示す点にある。富士山麓の数多い丘陵は、なだらかな傾斜を示しながら、その裾に展開するが、その大半はコニーデ型火山に合うよう山裾に沿って一定の幅を持つものである。しかし、丸ヶ谷戸遺跡の立地する丘陵は特異な形態を示すと共に開析谷により、周囲を区画され、後背にその上段の丘陵崖が屏風のように聳立することにより極めて独立性が強い景観を示していると言える。因みに、この丸ヶ谷戸遺跡のある丘陵と上の丘陵とは比高差50メートルほどを測る。

丸ヶ谷戸遺跡が位置する富士根地区一帯は、古富士火山集塊質泥流層と呼ばれる古富士火山段階の地表を基盤とする新富士火山初期の溶岩流が及ばない範囲であるが、その範囲が富士宮市内でも遺跡の分布が濃密な地区の一つとほぼ合致しているわけである(第6図)。そこは、古富士火山と新富士火山との境に点在する湧水地とそこを水源とする川が數多く南下しており、それらがかつての遺跡での生活を根本から支えていたわけである。丸ヶ谷戸遺跡はこの遺跡地帯のもっとも西側に位置しているのである。このように、丸ヶ谷戸遺跡をはじめとして富士根地区に広がる一連の遺跡は、弓沢川左岸に展開する遺跡群として弓沢川あるいはその支流の中沢川や久遠寺川などに依存しているわけである。その弓沢川は、枯れ沢である富士山中の市兵衛沢に始まる河川であり、この遺跡分布地域辺りで湧水や各支流からの水が集まり大型河川にその姿を変える。そして、星山丘陵沿いに流れる市内で二番目の規模を誇る潤井川に合流し、いずれは駿河湾へと流れ込むようになる。つまり、駿河湾～星山丘陵～富士根地区は潤井川・弓沢川を通じた河川による直接的な結びつきを持つのである。

ところが、弓沢川流域もその右岸になると、新富士火山の扇状地堆積物に覆われ、安定した平坦地が少ない地形環境の悪さや十分な水を取水することができない自然条件の悪さから原始・古代の遺跡がほとんど認められない地域が広がっている。



第5図 遺跡位置図

2. 歴史的環境

丸ヶ谷戸遺跡(20)の位置する富士根地区は、富士宮市内でも有数の遺跡分布地域である(第6図、第1表)。この地域で最初に遺跡の形成が窺えるのは、縄文時代早期の若宮遺跡(57)からである。縄文時代の遺跡は、遺跡分布域でもその高所を中心に展開しており、縄文時代晚期の辰野遺跡(8)まで連続と営まれている様子が知られる。

縄文時代前期では、木島式土器・清水ノ上I式土器の良好な資料が出土している出水遺跡(30)や当該期の竪穴住居址が検出されている峯石遺跡(9)、清水ノ上II式土器を伴う竪穴住居址が調査されている箕輪B遺跡(13)などの諸遺跡が上げられ、面的な広がりが明らかとなる。

縄文時代中期～後期にかけては、弓沢川や潤井川流域を中心として遺跡が爆発的な増加を示すようになるとされている。それは、長野県を中心とした中部高地の動向に同調したもので、

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	波沢遺跡	弥生(中)、中世、近世	45	泉遺跡	縄文(後)、弥生(後)、古墳、平安、近世
2	行人塚古墳	古墳	46	境戸1号墳	古墳
3	舞々木2号墳	古墳	47	滝戸遺跡	縄文、弥生、古墳
4	舞々木1号墳	古墳	48	羽衣町遺跡	縄文、弥生(後)、古墳(前)
5	室田遺跡	縄文(中・後)、古墳、中世、近世	49	田中遺跡	弥生(後)
6	時田遺跡	縄文(中・後)、古墳	50	向田遺跡	古墳(前)
7	峰ヶ谷戸遺跡	縄文(前)・中)、古墳	51	虚空蔵社古墳	古墳(後)
8	辰野遺跡	縄文(早・中・晚)、弥生(中)、古墳	52	上石敷遺跡	縄文、古墳、奈良、平安、中世、近世
9	峯石遺跡	縄文(中・後)、古墳、奈良	53	石敷遺跡	縄文、弥生、古墳(前)、奈良、中世
10	上ノ山遺跡	縄文(早・中・後)	54	萩間遺跡	縄文(中)
11	福王塚遺跡	縄文(早・中・後)	55	中ノ上手遺跡	縄文(前)、古墳(前)
12	笠輪A遺跡	縄文(中・後)、古墳、中世、近世	56	代官屋敷遺跡	縄文(早・中・後)、古墳
13	笠輪B遺跡	縄文(中・後)、古墳	57	若宮遺跡	縄文(早)
14	上中村遺跡	弥生(後)～古墳(前)	58	者宮古墳群	古墳
15	福知神社遺跡	弥生(後)、古墳(前)	59	野中原原遺跡	縄文(中・後)、弥生、古墳
16	琴平遺跡	弥生、古墳	60	野中中村遺跡	縄文(中)、弥生、古墳(前)
17	二ノ宮遺跡	古墳(前～後)、奈良	61	黒田向林遺跡	縄文(早)
18	城山遺跡	古墳(前～後)、中世	62	坊地上海跡	縄文(早)・中)、弥生、古墳
19	若ノ宮遺跡	古墳(前～後)、中世	63	坊地下遺跡	古墳(前)
20	五ヶ谷戸遺跡	縄文(中～後)、古墳、中世	64	坊地南遺跡	古墳(前)
21	二ノ寺遺跡	縄文(前)、古墳(前)	65	月の輪平遺跡	縄文、古墳
22	大室遺跡	縄文(中・後)、古墳	66	月の輪下遺跡	古墳(前)
23	大室古墳	古墳(後)	67	月の輪上遺跡	縄文、弥生、古墳、中世、近世
24	神祖3号墳	古墳(後)	68	南部谷戸遺跡	縄文、古墳
25	神祖2号墳	古墳(後)	69	月の輪法印塚古墳	古墳
26	神祖山・神古墳	古墳(後)	70	五反田遺跡	縄文(中)、古墳
27	出水西遺跡	古墳(前)	71	奥山地遺跡	縄文(早・前)、古墳
28	寺ノ後遺跡	縄文(中)	72	杉林遺跡	弥生(後)～古墳(前)
29	藏沢遺跡	縄文	73	下ヶ谷戸遺跡	弥生(後)～古墳(前)
30	出水遺跡	縄文(前・中)、古墳	74	内久子遺跡	弥生～古墳
31	出水東遺跡	縄文、古墳(前)	75	上高原遺跡	縄文(中)
32	金井坂遺跡	縄文(中)	76	権現遺跡	縄文(前・中)、古墳(前)、奈良
33	東田遺跡	弥生、古墳	77	上宿遺跡	縄文(早・中)、古墳
34	貴船町遺跡	弥生、古墳(前～後)、奈良	78	蟹入越遺跡	縄文(中・後)、弥生、古墳
35	西町遺跡	弥生(後)、古墳(前)	79	川坂遺跡	奈良～平安
36	浅間大社遺跡	縄文(早)、古墳、平安、中世、近世	80	ジンジン沢遺跡	縄文(早・中・後)、古墳
37	大宮城跡	古墳、奈良、平安、中世、近世	81	スギナクボ遺跡	縄文(中)、平安、中世
38	速雀町遺跡	弥生、古墳	82	後文神社遺跡	縄文(早)、古墳(前)
39	中沢遺跡	古墳、奈良、中世	83	吉野屋敷	中世、近世
40	木ノ行寺遺跡	縄文(中・後)、古墳、奈良	84	外谷戸遺跡	縄文(早)
41	寺内山・神古墳	古墳(後)	85	明星山遺跡	縄文(中)
42	小泉中村遺跡	縄文(後)、古墳(前)	86	芦戸下谷戸遺跡	縄文、古墳、奈良、平安
43	寺内遺跡	縄文(前・中)、古墳	87	下高原遺跡	縄文
44	小泉向原遺跡	縄文(中)			

第1表 周辺の遺跡一覧



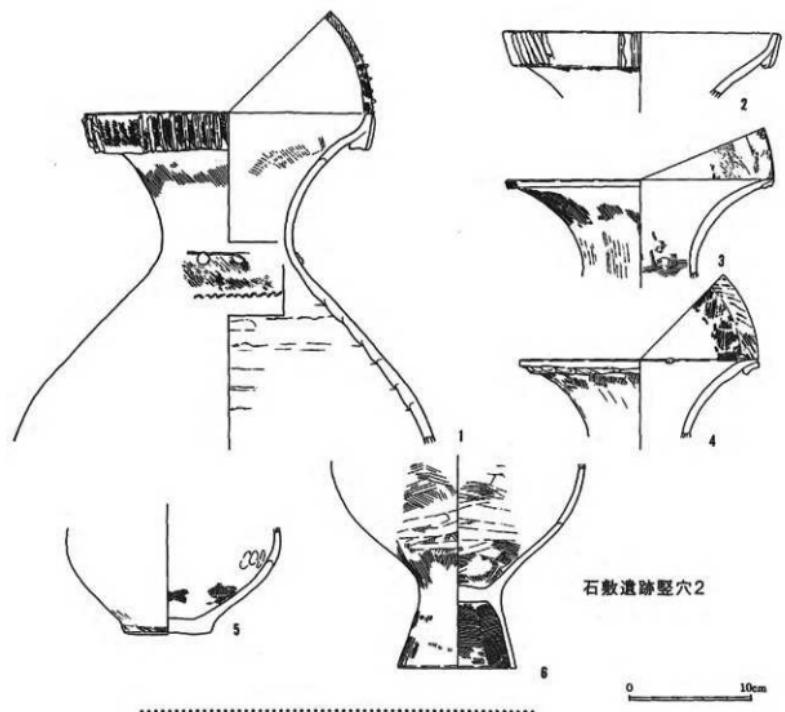
第6図 周辺の遺跡分布図

勝坂式土器、加曾利E式土器、曾利式土器、堀ノ内式土器などの段階はその盛行期として捉えることができる。ただし、遺跡としては箕輪A遺跡（12）、滝ノ上遺跡、滝戸遺跡（47）など拠点となる遺跡で認められる実態である。拠点となるこのような集落遺跡の登場とその発展過程の中で、そこからは豊富な遺物や様々な造構の発見があり、他を大きく圧倒して、遺跡間でその性格に起因して相互の格差が明らかになる。このような拠点集落に対する分村的な遺跡の実態については、遺跡の調査例がなくよく分からぬのが、この丸ヶ谷戸遺跡のような少量の当該期遺物を出土する遺跡がそれに相当するのかもしれない。その実態は星山丘陵の遺跡に対しても指摘できることで、滝戸遺跡や福伝遺跡、甲石遺跡などを一つのグループとする拠点集落に対して、月の輪平遺跡（65）や月の輪上遺跡（67）などの少量の遺物を出土する遺跡は、集落での機能の違いを持つものとして理解することができる。

縄文時代後期～晩期については、遺跡がその衰退期を迎えることを指摘でき、縄文時代晩期前半の土器の出土が確認されている滝戸遺跡と辰野遺跡などの一部の遺跡を残し、その数は大幅に減少する。

縄文時代晩期後半から弥生時代前期までは、長い遺跡の空白期として捉えることができ、この段階の市内における遺跡の発見例はない。この段階の遺跡としては、東名高速道路の富士川サービスエリアとなっている富士川町山王遺跡を上げることができ、富士川の流域に遺跡の所在が知られる程度となる。ただし、弥生時代前期の後半になると現在の富士宮市立富丘小学校付近に渋沢遺跡（1）が築かれ、それから潤井川を挟んで対岸の羽鮒丘陵内の独立丘陵部に別所遺跡が出現するようになる。ただし、渋沢遺跡で調査されている土壙などが主体を示すのは、あくまでも弥生時代中期初頭丸子式土器併行段階のことであり、弥生時代前期の実態ははつきりしない。そして、丸子式土器併行段階には、生活用水を取得できないと思われる万野風穴の入り口部分の押出遺跡にまで遺跡の造営が確認されるようになるが、それは局地的なものであり面的な広がりを示すものではない。この段階の遺跡としては、これら以外に、上谷戸遺跡や山梨県上九一色村南二条遺跡、同河口町鶴の島遺跡など水田に依存しているとされる弥生時代の遺跡とは裏腹に、その可耕地がほとんど期待できない富士山西麓に点在するようになる。その弥生時代中期初頭の遺跡もその継続性は弱く、弥生時代中期中葉に継続するものは見られない。それは、遺跡の主たる生業の違いによるものと考えられるが、水田可耕地の期待されない富士山西麓から遺跡はその姿を消すようになる。唯一、芝川流域の芝川町辻遺跡において、弥生時代中期後半の遺物の出土が知られるのみとなる。

丸ヶ谷戸遺跡周辺において本格的な開発が再開されるのは、弥生時代後期（雌鹿塚式期）後半になってからである。平成11年に発掘調査が実施された石敷遺跡（53）では、弥生時代後期後半の堅穴住居址が7軒調査されている。この遺跡で良好な出土を示す堅穴2の土器群（第7図）は、複合部の加飾性が強い1の複合口縁壺の型式などから雌鹿塚II式期の新しい段階のものとして捉えることができる。この堅穴などを含めた全体の土器の様相から、この遺跡は雌鹿塚II～III式期段階の集落であり、比較的短期間にその消長を示すことが分かる。雌鹿塚II式期は、菊川式土器を中心とした外来系土器の移動が顕在化する時期に当たるが、この段階に潤井川左岸の沖積地にある泉遺跡（45）の環濠が埋められている。この段階は弥生時代後期の大きな画期として認めることができ、その時期に石敷遺跡の弥生時代集落が出現している。沖積地の遺跡の終焉に相關してその登場が促されたかどうかはよく分からぬが、時間的な経過では指摘できる事象である。これと同じように雌鹿塚II式期に黒田の月の輪上遺跡への進出も確認



木ノ行寺遺跡



寺内遺跡



石敷遺跡

第7図 土器実測図

されており、富士山側の富士根地区と星山丘陵の黒田・星山地区に対する開発がほぼ同時に開始されたと理解できる状況にある。このように、雌鹿塚Ⅱ式期は、泉遺跡が終焉を迎える、月の輪上遺跡あるいは石敷遺跡などの開始が確認できる。そして、その状況は、沖積地から丘陵への集落の移動として指摘できるわけである。このように集落の消長を通じてその分布域の変化を考える中で、泉遺跡と潤井川を挟んで隣接する滝戸遺跡は、星山の丘陵部にある遺跡で、雌鹿塚Ⅰ式期から古墳時代前期の大邱Ⅳ式期まで認められる非常に継続性の強い特異な遺跡として捉えることができる。

弥生時代が終わり、そして古墳時代が始まる時代の画期は、富士宮市の場合、弥生時代後期末に月の輪上遺跡の環濠が埋められ、隣接して月の輪平遺跡の集落が築かれることにより認識できる。このような状況は、富士根地区において確認例はないが、石敷遺跡の終焉と丸ヶ谷戸遺跡の開始との関連を段階的な動態として理解することはできる。ただ、月の輪上遺跡のように、富士根地区において弥生時代後期末（雌鹿塚Ⅳ式期）の標準的な資料の出土がまだないため、実際の状況についてはよく分からぬ。

古墳時代前期になると、丸ヶ谷戸遺跡を代表として富士根地区における遺跡の増加を窺うことができる。丸ヶ谷戸遺跡の南東側に展開する木ノ行寺遺跡（40）や寺内遺跡（43）あるいは、前述の石敷遺跡でも弥生時代集落とは大きく地点を違える場所で表採された大邱Ⅰ式期の土器類（第7図）からその一端を垣間見ることができる。また、これらの遺跡と同じ地域にある上石敷遺跡（52）では、大邱Ⅰ～Ⅱ式期の堅穴住居址8軒と溝1条が調査されている。溝は大邱Ⅱ式期に埋められたもので、その埋土中から台付甕、タタキ甕、壺、小型壺、高杯、小型鉢などが出土している。この大邱Ⅰ～Ⅱ式期は、富士宮市内においても広範囲な遺跡の進出が認められる段階で、標高660メートルを測る田貫湖畔の長者ヶ原B遺跡において当該期の堅穴住居址2軒、陥穴2基、溝などが調査され、標高1025メートルを測る山梨県上九一色村西一条遺跡ではタタキ甕が採集されている。この高地における集落の造営は、弥生時代中期前葉以来のことであるが、その状況は富士根地区や星山地区における面的な遺跡の広がりの中での高地に対する進出であり、弥生時代中期におけるものとは大きく様相を違えている。

星山・黒田地区の月の輪平遺跡が大邱Ⅰ～IVまで継続するのに対して、富士根地区の多くの遺跡は、大邱Ⅱ式期を以って消失している。それは、大邱Ⅲ式期に在地化するS字甕の出土が、比較的この富士根地区で少ないとから間接的に証明されることで、この地区における地域型のS字甕の出土は、辰戸遺跡などで数点認められるに過ぎなくなる（註）。それは、継続的な集落が営まれる滝戸遺跡、泉遺跡、月の輪平遺跡や三連甕形土器が出土している野中向原遺跡（59）など潤井川流域で大邱Ⅲ～IV式期の集落が盛行する状況とは大きな違いを示す。

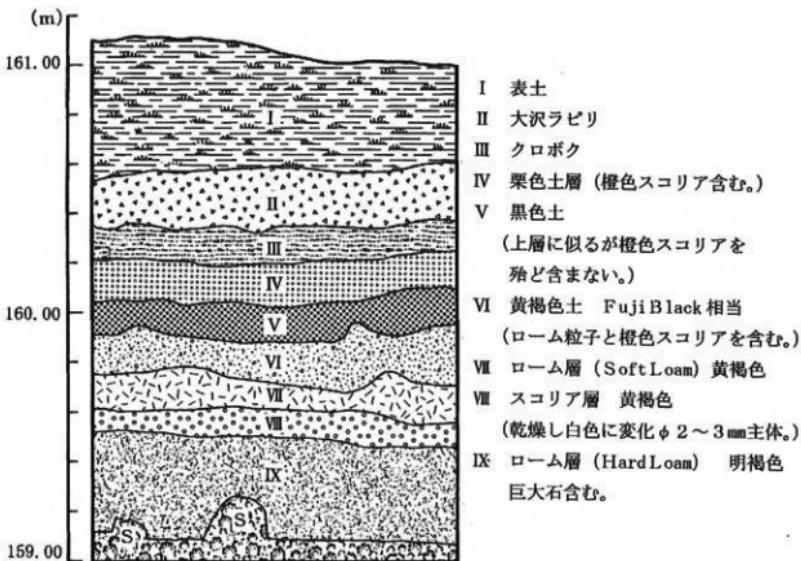
このように、富士根地区の場合、古墳時代前期後半より遺跡の動向ははっきりしなくなり、丸ヶ谷戸遺跡の終わるころ急速この地域から撤退しているようである。それ以後、古墳時代後期に至って木ノ行寺遺跡で集落の形成が確認され、さらに、奈良時代になると權現遺跡、上石敷遺跡、石敷遺跡、中沢遺跡（39）、峯石遺跡など、富士根でも小泉地区を中心に集落遺跡が面的な広がりを示すようになる。

（註）大邱Ⅲ式期以降における富士根地区の遺跡の動向ははっきりしなくなるが、かつて丸ヶ谷戸遺跡で出土した大邱Ⅲ式期の二重口縁壺が報告されている（植松1971）。

文献：植松章八1971「第1章千居遺跡や月の輪平遺跡」『富士宮市史上巻』富士宮市

3 遺跡の層序

丸ヶ谷戸遺跡の層序は、過去に調査された第1次調査地点や周辺の遺跡と同様に、堆積幅とスコリア粒子の混入の多さを特徴とし、違いを示している。最上層から、表土→大沢ラビリ→クロボク→栗色土層（橙色スコリア含む暗褐色土層）→黒色土（上層に類似するが橙色スコリアをほとんど含まない。）→ローム粒子と橙色スコリアを含んだ黄褐色土（富士黒土層に相当）→黄褐色ローム質土（ソフトローム）→黄褐色スコリア層（白色に変化したこの層が調査区西側にあるSD2の壁体より確認できる。）→巨大石を含んだ明褐色ローム層（ハードローム）と分層できる（第8図）。しかし後世の造成や開墾などによる土砂の移動があり普遍的な層序は調査区全体で認められず、発掘調査は弥生時代以降の遺構確認面である大沢ラビリ層が展開する調査区東側を主体にして実施された。

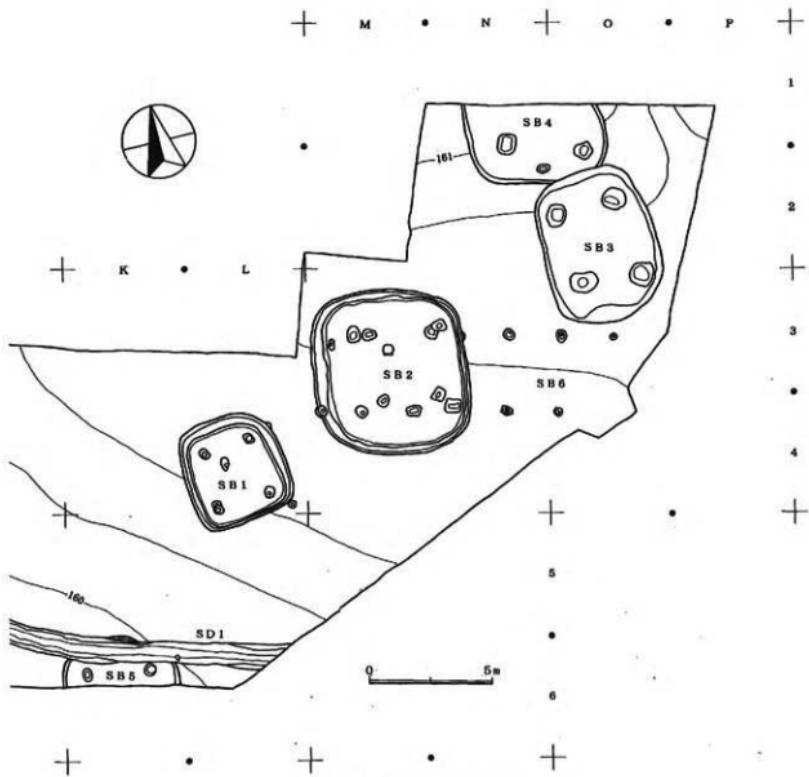


第8図 層序断面図

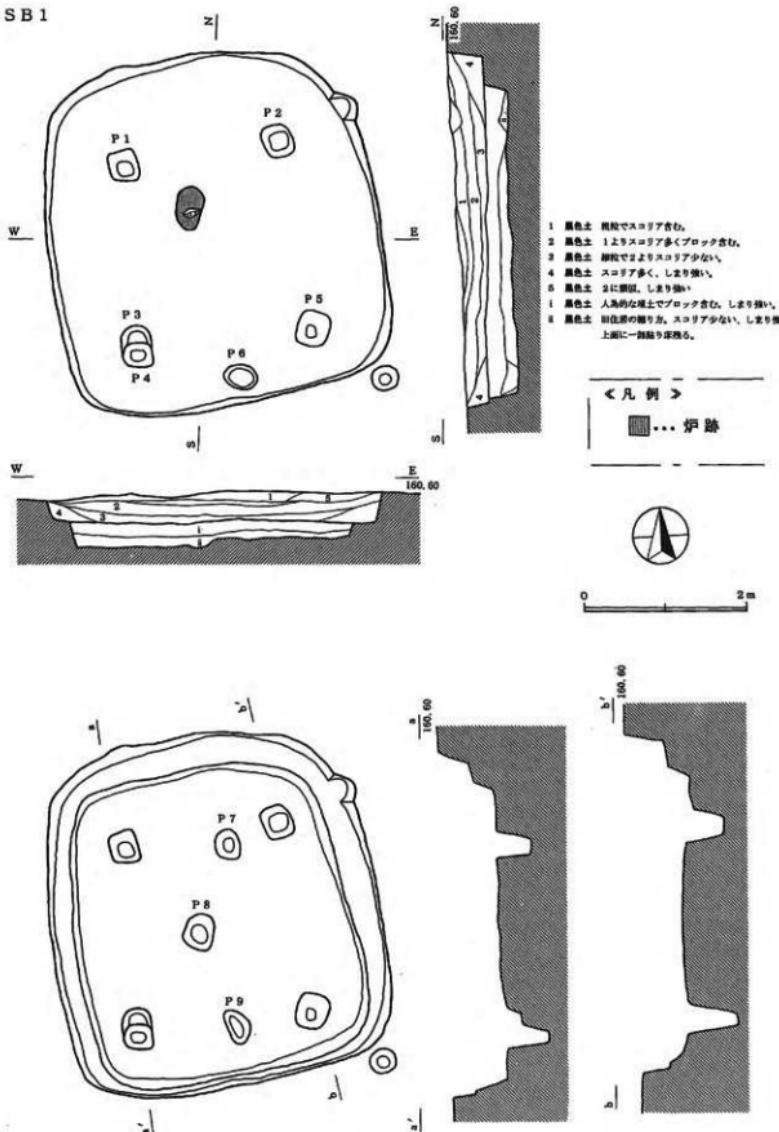
第三章 遺構

1. 古墳時代

今回の調査では、堅穴式住居跡5軒、掘立柱建物跡1棟、溝1条が検出されている。これらの遺構は出土遺物より古墳時代前期の年代が当てられる。遺構の分布（第9・18図）は調査区の東半Kグリッド以東の標高161から160メートルの緩やかな丘陵傾斜面に集中して住居跡と建物跡が検出されている。



第9図 SB位置図



S B 1 (第10図)

S B 1 は L - 4 グリッドを中心にその範囲が確認され、調査区北東の極めて緩やかな丘陵の傾斜部に位置している。形状は隅丸方形を呈し、床面積は 14.2 平方メートルを測る小型竪穴式住居である。ほぼ水平にされた平坦な床面で、黒色土を主体とする床面が壁際を除いた住居中央部より堅固な硬化面の広がりで確認できる。

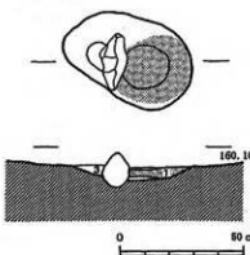
この住居跡の内部からは 6 基のピットと 1 基の炉跡が検出されている。このうち P 1 から P 4 まで 4 基のピットの深さは P 1 が 40 センチメートル、P 2 が 45 センチメートル、P 4 が 50 センチメートル、P 5 が 50 センチメートルで、いずれも平面形が正方形に近い隅丸形で、35 × 30 平方センチメートルから 45 × 40 平方センチメートルの同規模のサイズに収まる小型のピットで、形状や配置から判断して、当住居の主柱穴であったとみられる。P 3 は P 4 より浅いピットであり、P 4 と重複することから、P 4 と同じ意図で掘り込まれた柱穴であろうと考えられる。P 6 は住居壁の立ち上がりや炉の位置関係から、おそらく貯蔵穴や梯子穴のような入口部施設であったと思われる。

炉跡（第11図上）は長さ 25 センチメートル、幅 12 センチメートル、高さ 14 センチメートルの火山岩質の石 1 点を伴って検出されている。住居の中央部よりやや北側に位置する地床炉であったとみられ、にぶい赤褐色の焼土が炉の中央部から北側部分にかけて濃い密度の拡がりをみる。平面は 54 × 32 平方センチメートルの楕円形を呈し、燃焼面の中心部よりやや南側に石が配置されている。この石は炉の構造内に一部を埋め込まれ、石の一部が被熱による変色が認められることから、炉石の機能を果たしていたと考えられる。確認面における炉の上面に厚さ 1 センチメートル弱に堆積した層は、焼土粒子を含んだ黒色土で締まりは無いが、その層の下は焼け締まった焼土が約 5 センチメートルの厚さで堆積し、焼土粒子のほかにスコリアを含んでいる。断面形は丸底で緩やかに立ち上がる。

この住居跡の覆土の堆積状態は、住居縁辺部の壁体の崩落が確認され、床上より徐々にスコリア混じりの黒色土が自然堆積している。住居跡確認面から床面までの堆積の厚さは約 30 センチメートル前後である。床面の層はブロック状にスコリア混入土が点在する、しまりが強い黒色土で、人為的な理土であることが窺えることからも、当住居跡の貼床であることが分かる。床下の層は粗いスコリア層が堆積するが、スコリアの含有量は上層に比べて減少する。床下は約 30 から 40 センチメートルの深さで掘り方の基底部に達する。

掘り方は、床下全面に及んでいる。掘り方の断面形は二段構造で底部が平坦であり、S B 1 の規模よりもひと回り縮小された落ち込み状に掘り込まれた住居跡であったような形状を呈している。第 V 章において後述されるが、これは S B 1 で建て替えが行なわれたことが示される。

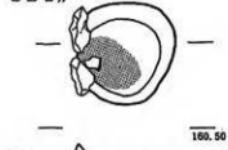
S B 1 炉



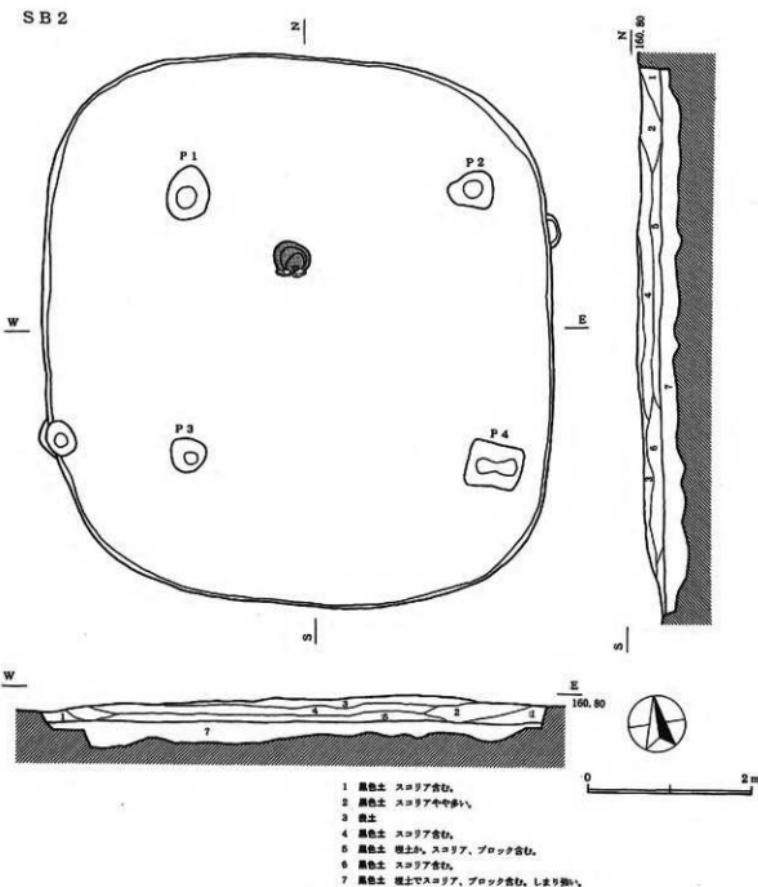
【土 層】

1. 焼土
2. 黒色土 焼土粒を含む。
3. 黑色土 焼土、スコリア粒を含む。

S B 2 炉



第11図 S B 1・S B 2 炉

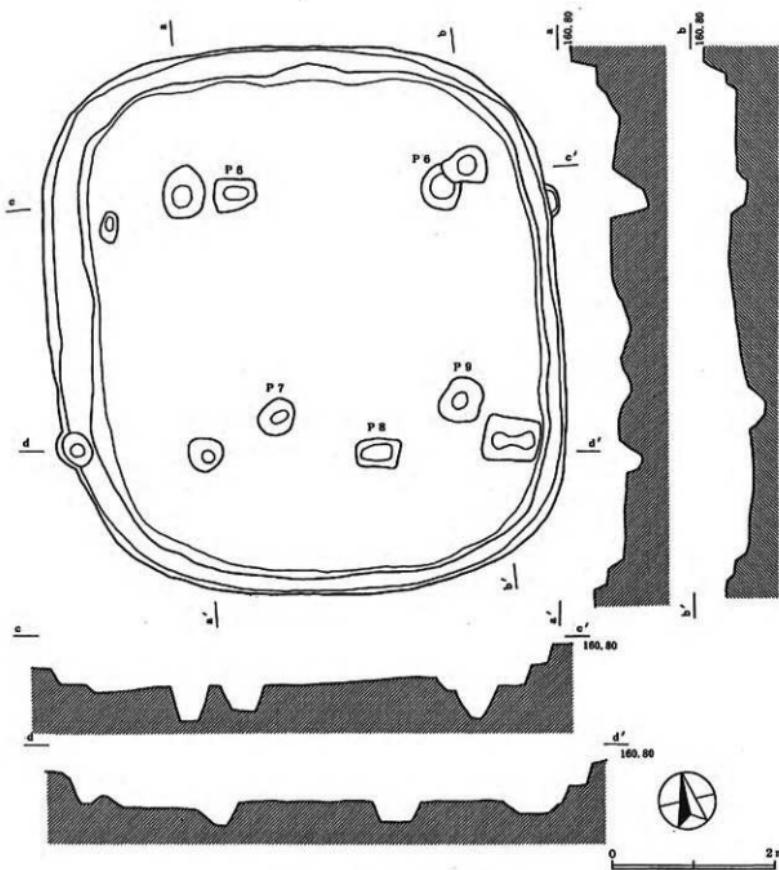


第12図 SB 2 実測図

SB 2 (第12・13図)

SB 2 は M・N - 3・4 グリッド内で確認され、SB 1 の位置より 1.5 メートルほど東に離れて位置する。平面は隅丸方形を呈し、床面積は 30.4 平方メートルの大型竪穴式住居である。堅固で平坦な床面が住居全体にほぼ水平な広がりをもって確認できる。

住居跡内部は、床面より 4 基のピットと 1 基の炉跡が検出されている。P 1 の平面形は 65 × 50 平方センチメートルの楕円形で、深さ 50 センチメートル、P 2 は 45 × 55 平方センチメートルの歪円形で、深さ 40 センチメートル、P 3 は 40 × 45 平方センチメートルの小型円形で、深さ 30 センチメートル、P 4 は 50 × 65 平方センチメートルの長方形で深さ 20 センチメートルである。掘り方からも 5 基のピットが確認されており、これらを P 5 から P 9 とした。P 5 は 40 × 55 平



第13図 SB 2 実測図（掘り方）

方センチメートルの方形で、深さ35センチメートル、P 6は 55×50 平方センチメートルの円形で深さ20センチメートル、P 7は平面形のみの確認で、 45×40 平方センチメートルの楕円形、P 8は 35×55 平方センチメートルの長方形で、深さ30センチメートル、P 9は平面形のみの確認で、 55×50 平方センチメートルの楕円形である。ピットの形状と規模にばらつきがみられるが、外側に配置されたP 1からP 4がSB 2の主柱穴であるとみられる。住居内南側に配置されたP 8が入口部施設であるとみられる。

炉跡（第11図下）は住居内の中央部より若干北側に平面約300平方センチメートルの規模で円形状の拡がりで焼土粒子の混入が確認できる。この焼土面の南端部に炉石が埋め込まれるように配置されている。炉石は2点あり、ひとつは長さ18センチメートル、幅11センチメートル、高さ8センチメートルで、もうひとつは長さ21センチメートル、幅10センチメートル、高さ7センチメートルのいずれも大きさの似通う多孔質の火山岩を使用しており、S B 1と同じく地床炉であるとみられる。炉を半裁してみると、炉石側より流れ込み状に層を分けることができ、いずれも焼土粒子を含んだ黒色土であるが、外縁側はスコリア粒子を含んでいる。断面形は丸底で緩やかに立ち上がる。

この住居跡の覆土の堆積状態は、住居縁辺部の壁体の崩落が二次にわたり確認されるが、二度目の堆積以前に住居床面上に橙色ブロックが混入した層の堆積がみられ、人為的な埋め戻しが窺える。この層より上にスコリア粒子を含んだ黒色土が自然堆積し、上層につれてスコリア粒子の含有が目立つようになる。住居跡確認面より床面までの堆積の厚さはおよそ40センチメートルから20センチメートル前後である。床面の層はブロック状にスコリア混入土が点在する、しまりが強い黒色土で、人為的な埋土であることが窺えることからも、当住居跡の貼床であることが分かる。床下は、およそ20センチメートルの深さで掘り方の基底部に達する。

掘り方は、床下全面において、断面形は二段構造で底部はほぼ平坦にされている。S B 1の掘り方構造と同様に、S B 2の規模より、ひとまわり小さな住居の形状を呈しており、これも後述されるが、当住居跡の建て替えに関係するとみられる。

S B 3 (第14図)

S B 3はO-2・3グリッド内で確認され、緩やかな丘陵傾斜部に位置しているが、後世の土地改造の削平によって住居上部構造が欠損しているため、掘り方面での検出となった。平面形は、南北方向に長い隅丸長方形を呈し、規模は23平方メートルを測る中型堅穴式住居である。S B 4をわずかに切って構築されたとみられる。

住居跡内部は、4か所のピット状のくぼみと焼土面が認められる。前者のくぼみは4基とも方形形状の平面形でおよそ85×85平方センチメートル前後の規模であり、住居内の四隅に配置されていることから、おそらく主柱穴であったと思われる。焼土面は住居内の中央より北側の位置で検出され、若干の赤化が確認できる程度であるが、住居内における位置的な関係からみて、炉跡であったと考えてよいと思われる。

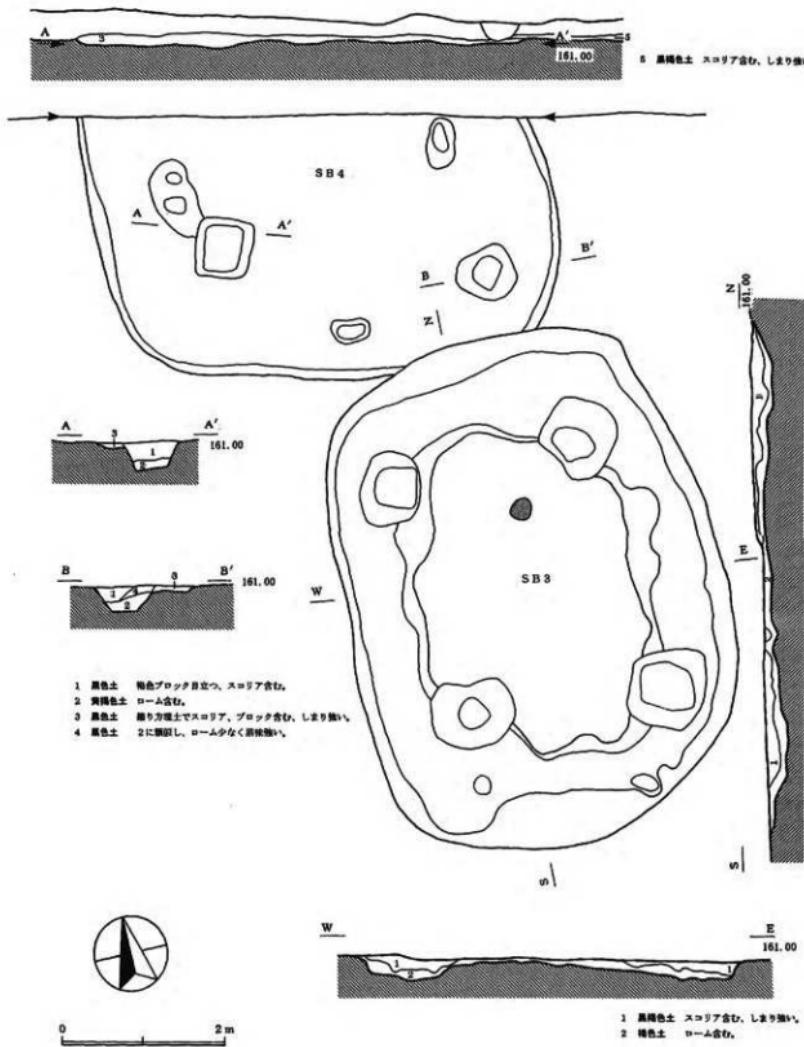
掘り方は、床下外縁部を周濠状に掘り込み、中央部を方台状に高く残した形状である。底面はやや起伏があり、その面が深く下がった周濠箇所の一部に、スコリア粒子を少量含んだ、しまりのある黒色土が堆積しており、貼床が残存したものと考えられる。

S B 4 (第14図)

S B 4は調査区北東端部N-O-1・2グリッド内で確認され、丘陵傾斜部に位置している。S B 3と同じ要因で掘り方面のみの残存状態で検出された。平面形は住居規模のおよそ半分であるが、約16.5平方メートルの確認範囲から中規模の隅丸方形を呈した堅穴式住居であるとみられる。住居跡の一部を、S B 3にわずかに切られている。

住居内部からは、ピットが3基検出されている。南端の小型の楕円形ピットは、当遺跡のこれまでの住居内構造と同じく入口部施設のためのものと思われる。やや大き目の左右のピット

SB 3 + 4



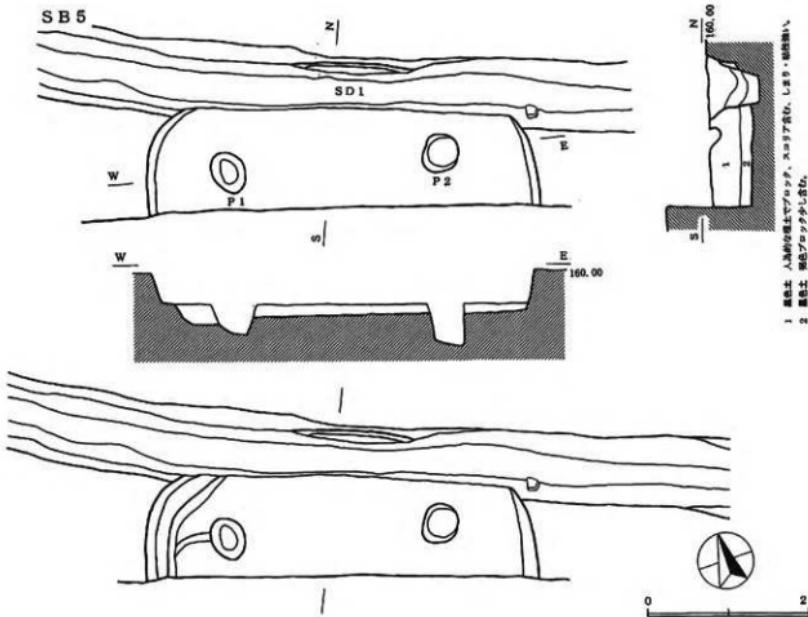
第14図 SB 3 + 4 実測図

は、南側より対面して右側のピットが不整方形状の平面を呈し、深さ32センチメートル、左側のピットが方形を呈し、深さ30センチメートルで、ともに断面が逆台形状で同規模であり、位置的にみて主柱穴であったと思われる。

この住居跡の覆土の堆積状態は、調査区の壁より確認されたが、掘り方面の上部にスコリア粒子を含んだ黒色土が20センチメートルから4センチメートルの厚さで住居幅内に堆積しており、しまりのある土質から貼床面が残存したものと思われる。掘り方は床下全面におよんでいるとみられ、底面はほぼ平坦で水平に仕上げられていたとみられる。

S B 5 (第15図)

S B 5はK-6グリッド内でその範囲が確認され、調査区内の丘陵傾斜部で最も南側に位置している。住居跡の範囲の約半分が調査区外へ延長されているため、全周は明らかではないが、東西径4.8メートルであることから、中規模の隅丸方形を呈した竪穴式住居であるとみられる。住居跡の北側箇所をSD 1に切られている。



第15図 S B 5 実測図

住居跡内部は、床面よりピットが2基検出されている。P 1 の平面形は43×40平方センチメートルの楕円形で、深さ34センチメートルを測り、P 2 は45×45平方センチメートルの楕円形で、深さ50センチメートルである。双方のピットとも同規模であり、位置的な関係から主柱穴であるとみられる。

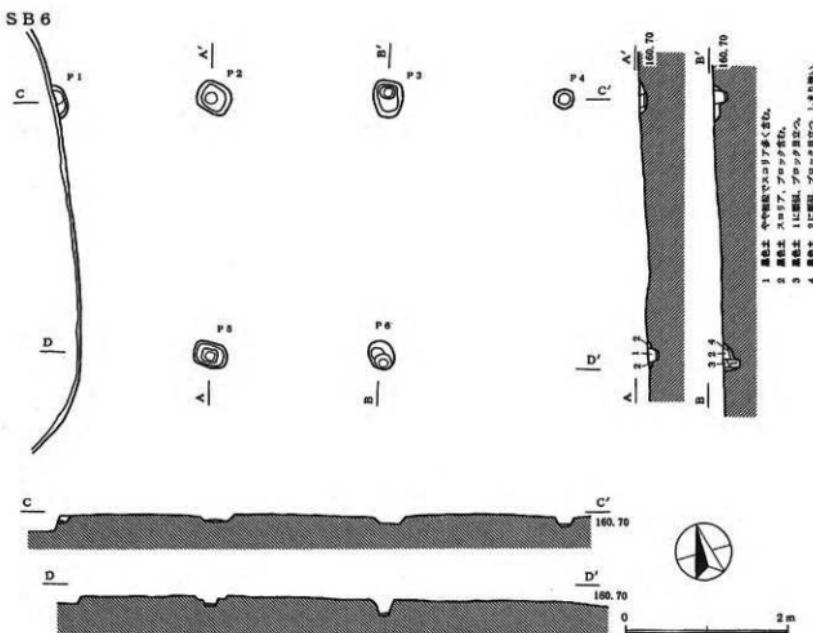
この住居跡の覆土の堆積状態は、黒色土がブロック状に散含するスコリア粒子混じりの黒色土が単層で床上に40センチメートル程度の厚さで堆積しており、人為的に埋め立てられた様子が窺える。床面はスコリア粒子を含む黒色土で、灰褐色土ブロックを少量含んだ貼床が12センチメートルの厚さで住居内に施されている。掘り方は、床下全面に及んでいるものとみられ、基底面は平坦に仕上げられている。

S B 6 (第16図)

S B 6 はN・O-3・4グリッドで確認され、S B 2 と S B 3 の中間にあたる緩やかな丘陵傾斜面に位置する。検出された6基の小型ピットが同寸法で二列に並行することから、掘立柱建物跡であることが考えられる。おそらく8基の柱穴から構成される梁行3メートル桁行6.3メートルの1間×3間の建物跡であったとみられるが、南北両列の西端に配置していた柱穴はS B 2 に切られ、南側列の東端の柱穴は消失しているため、北側4基、南側2基の柱穴列として検出された。

北側列に配置するそれぞれの柱穴の規模は、P 1 はS B 2 に切られているため、半分程度の残存状態でしかないが、長径42センチメートルを測り、深さ8センチメートルの楕円形状の平面形であったとみられる。P 2 は43×35平方センチメートルの隅丸方形で、深さ8センチメートル、P 3 は45×35平方センチメートルの隅丸方形で、深さ14センチメートル、P 4 は25×23平方センチメートルの円形で、深さ10センチメートルである。南側列に配置する柱穴の規模は、まず西端のピットがあるとみられる位置はS B 2 の構築により消滅し、P 5 は35×40平方センチメートルの隅丸長方形の平面形をしており、深さ12センチメートル、P 6 は40×30平方センチメートルの円形状で、深さ20センチメートルであり、東端のピットは、この確認面では消失している。形状はおよそ同規模で揃うが、ピットの深さは差異がみられ、東から二列目の梁行の柱穴は比較的深く掘り込まれ、また、傾斜の低地に配置された柱穴のほうが深く掘り込まれているように見受けられる。

柱穴内の覆土の状態で普遍的に認められるのが、スコリア粒子が顕著に混入した黒色土が柱痕上に堆積し、その周囲がブロック状の栗色土とスコリア粒子が混入した硬質の黒色土に覆われている状態である。P 6 は柱痕上の層の上に栗色土ブロックの混入が目立つ層が堆積し、その周囲の層の下に栗色土混入が増え、しまりが強い層が堆積しているため4層に分層される。また、いずれのピットの柱痕部分は直径14センチメートル前後で円形の硬化面が確認することができ、ほぼ同じ太さの柱材を用いた建物であったと思われる。

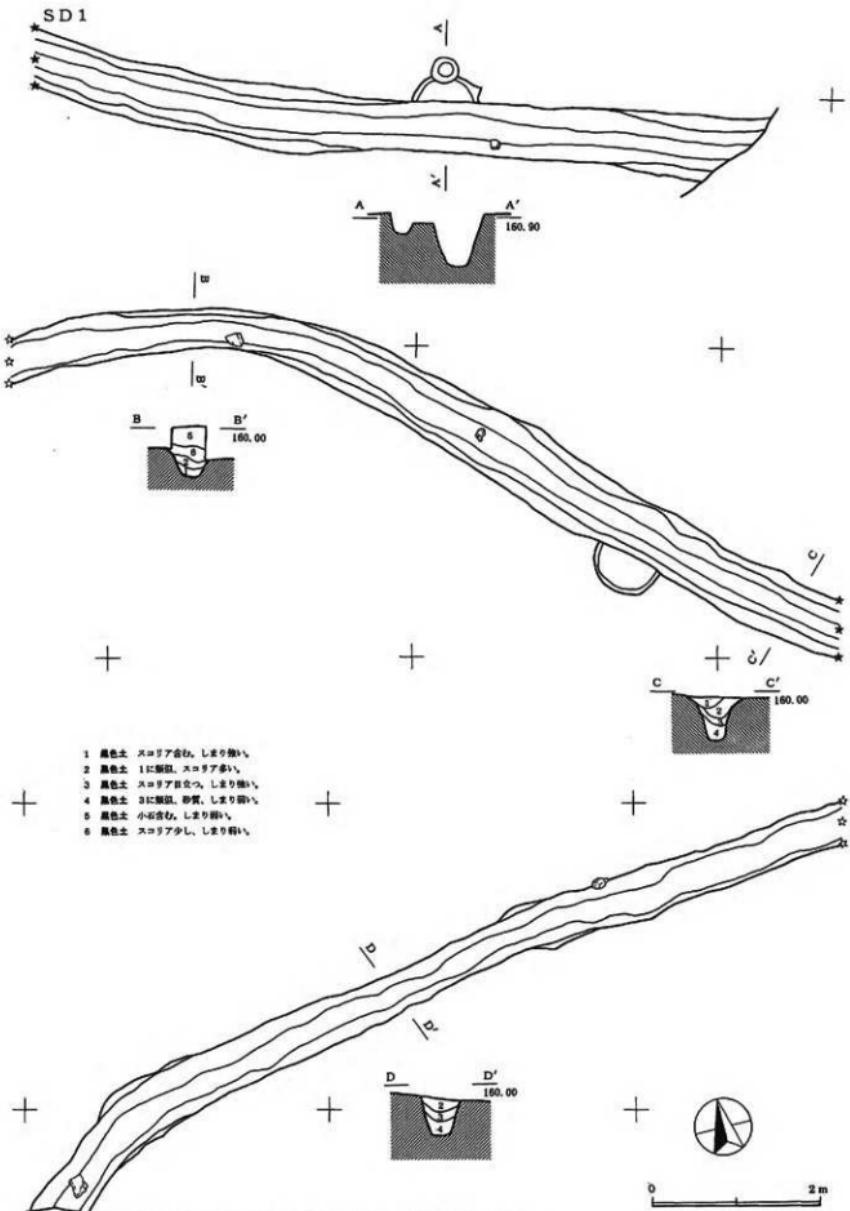


第16図 SB 6 実測図

SD 1 (第17図)

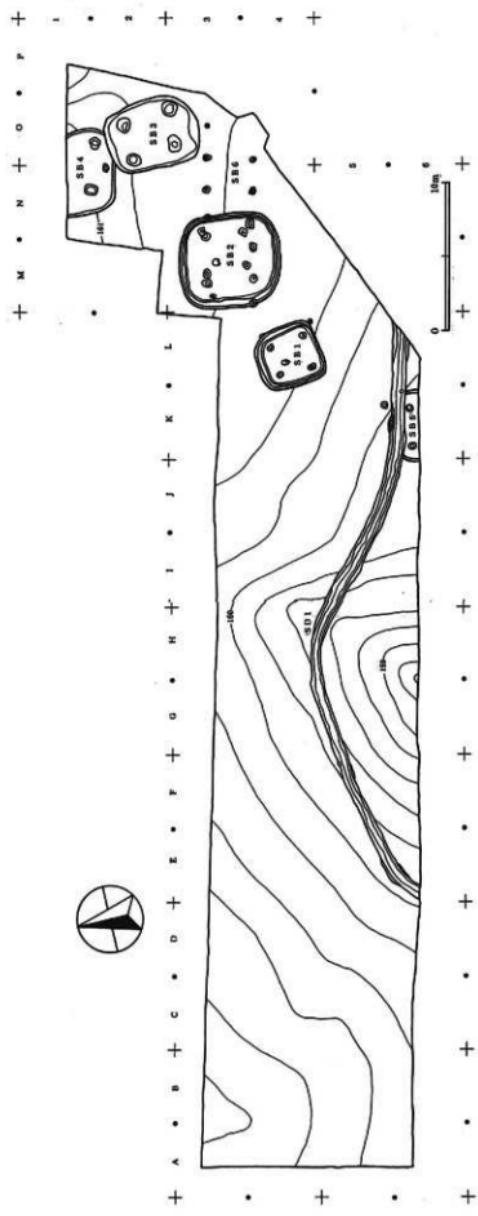
SD 1は調査区内の確認範囲では、L 6 グリッドの調査区東端を起点とし、丘陵傾斜の地形に沿うように曲線を描き、E 6 グリッドの調査区南端を終点として検出された溝状遺構である。延長約40メートルで、約70から110センチメートルの溝幅がある。丘陵を背後とする集落跡を囲むように彎曲する形態から、防御的性格の弱い環濠として構築されたものであると思われる。

SD 1の覆土の堆積状態は、砂質の黒色土が流れ込み、下層につれて橙色スコリア粒子の混入が目立つ。溝の断面は上場幅76から80センチメートル、下場幅26から40センチメートルでU字形を呈し、深さ64から66センチメートルを測る。溝底は平坦である。

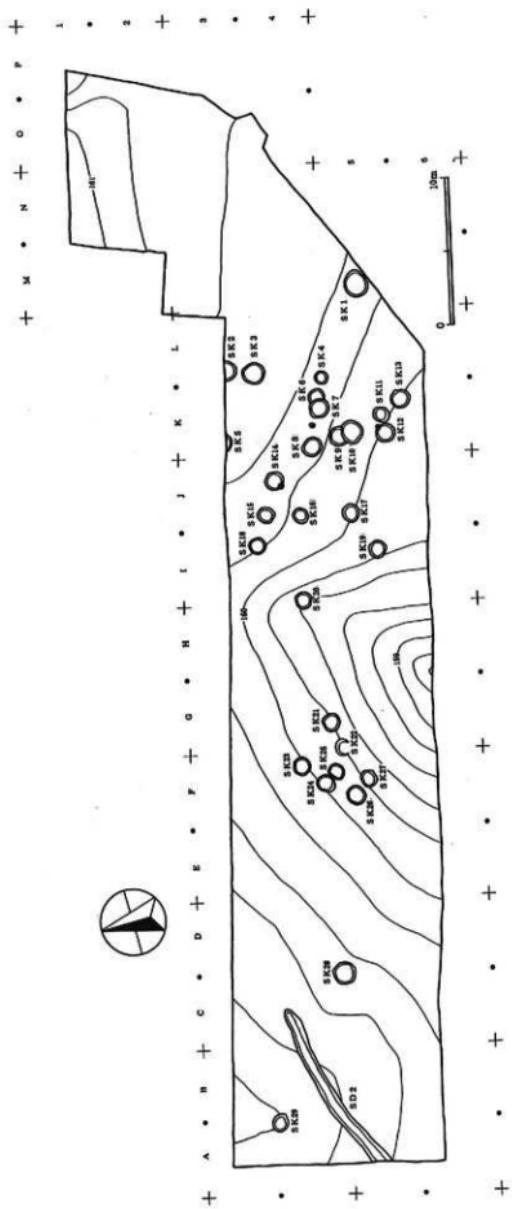


第17図 SD 1 実測図

第18圖 調查區全體圖（古墳時代）



第19図 調査区全体図（中近世以降）



2. 中近世以降

本遺跡の調査では古墳時代前期の集落跡のほかに、円形土坑29基と溝状遺構1条が検出されている（第19図）。これらの遺構は表土層下より確認され、積極的な性質を示す遺物を伴わないため、年代や明確な性格を判断し難いが、いずれも覆土の状態が軟質であり、他の遺構を切って検出されるため、中近世を遡ることのない遺構であると考えられる。

SK 1 ~ 29 (第20・21図)

調査区内の谷部をのぞく全域に散在する円形土坑は、I ~ L - 3 ~ 6グリッドに集中する一群と、F・G - 2・3グリッドに集中してみられるが、この検出状況により、どのような意図で配置されたものであるのかは見出せない。

県内のみならず、各地の遺跡で同類の検出状況をみる円形土坑の機能については、兵庫県多可郡八千代町の毘沙門堂前遺跡の事例（妙見山麓遺跡調査会2000）などから木桶を埋納した跡であることが推察でき、副葬品を伴出しないため、墓であったことは考え難く、かつて農地開墾が積極的に行なわれた当地域の現状より農業施設にかかる遺構であると思われる。遺構の規模および内容については観察表（第2表）に示してある。

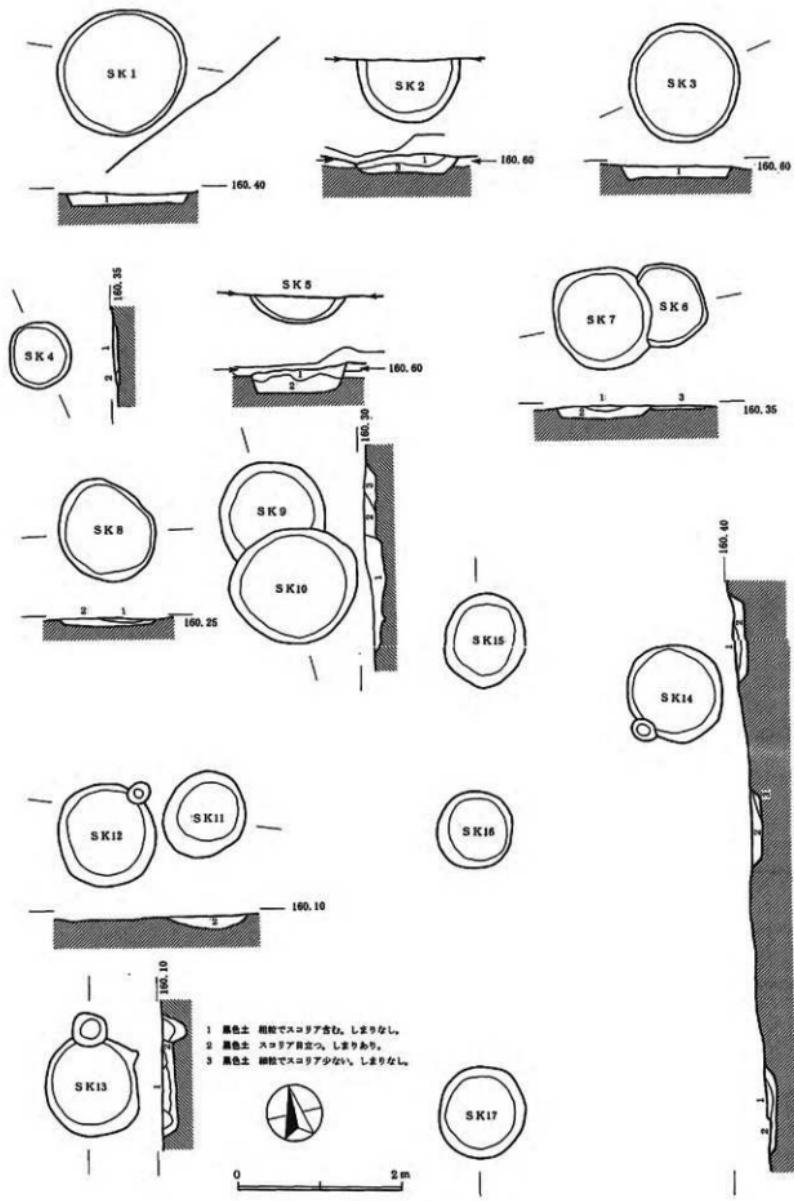
SD 2 (第20図下)

溝状遺構は調査区西側の扇状地堆積物層上に位置する。C - 4グリッドの遺構が消失するところを起点として南西方向に傾斜を下り、調査区西端のA - 5を終点とする延長約13メートルで、溝幅は76~84センチメートル、深さ10~18センチメートルを測る。覆土は黒色土でしまりがなく、下層は橙色スコリア粒子が若干混入している。

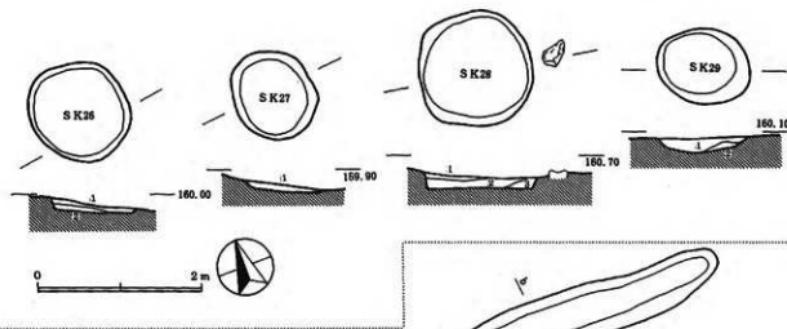
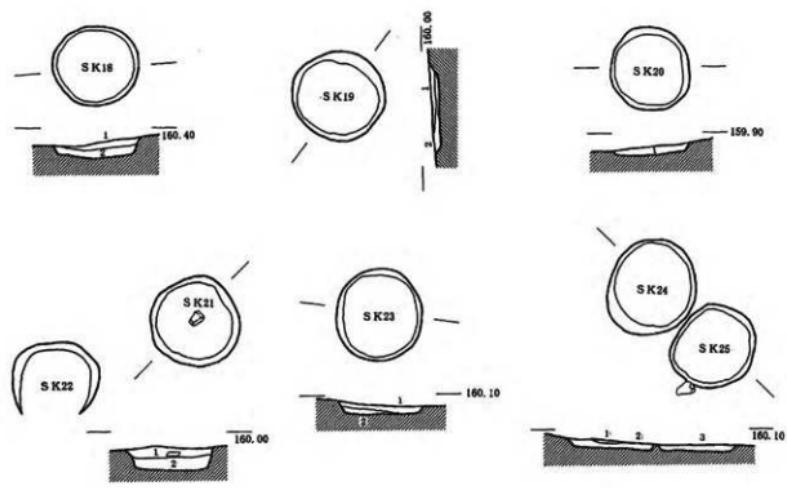
文献：妙見山麓遺跡調査会2000「IV上三原毘沙門堂前遺跡（1986・1987年）」『大和川流域の遺跡群II』

	直径 (cm)	深さ (cm)	残存状態		直径 (cm)	深さ (cm)	残存状態
SK 1	155	6	全周	SK 16	94	13	全周
SK 2	120	22	2/3	SK 17	110	11	全周
SK 3	137	14	全周	SK 18	118	10	全周
SK 4	80	5	全周	SK 19	108	6	全周
SK 5	114	27	1/3	SK 20	95	10	全周
SK 6	100	4	2/3	SK 21	110	27	全周
SK 7	119	17	全周	SK 22	100		2/3
SK 8	116	10	全周	SK 23	105	10	全周
SK 9	130	15	2/3	SK 24	110	10	全周
SK 10	142	20	全周	SK 25	96	8	全周
SK 11	100	15	全周	SK 26	128	14	全周
SK 12	118		全周	SK 27	95	7	全周
SK 13	120	18	全周	SK 28	140	14	全周
SK 14	112	9	全周	SK 29	113	6	全周
SK 15	113	16	全周				

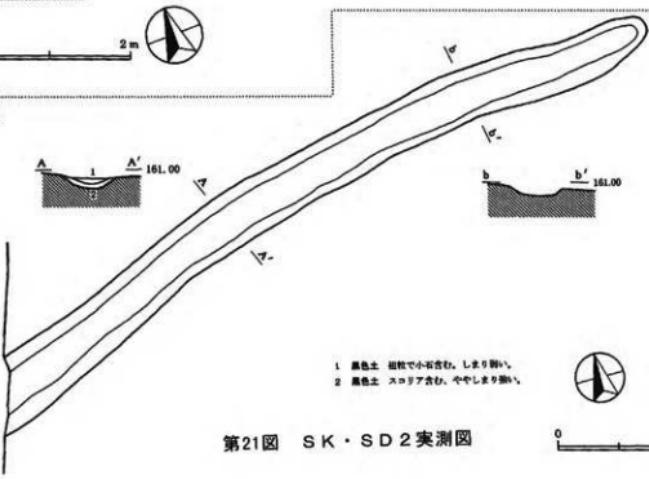
第2表 SK計測表



第20図 SK実測図



SD 2



1 黒色土 粗粒で小石含む。しまり弱い。
2 黒色土 スコリア含む。ややしまり強い。

第21図 SK・SD 2 実測図

0 2 m

第IV章 遺物

今回の調査では、遺構の項目で記載されている通り古墳時代前期の集落と中近世の土坑群が確認されている。中近世の土坑群から直接それらに伴う遺物の出土は認められなかった。この土坑は、富士宮市だけでなく近隣の市町村の諸遺跡でもよく見かける遺構で、大半は遺物を伴わないことを常としている。土坑に有機質のものが埋設あるいは埋納された可能性があるが、確認されていない。

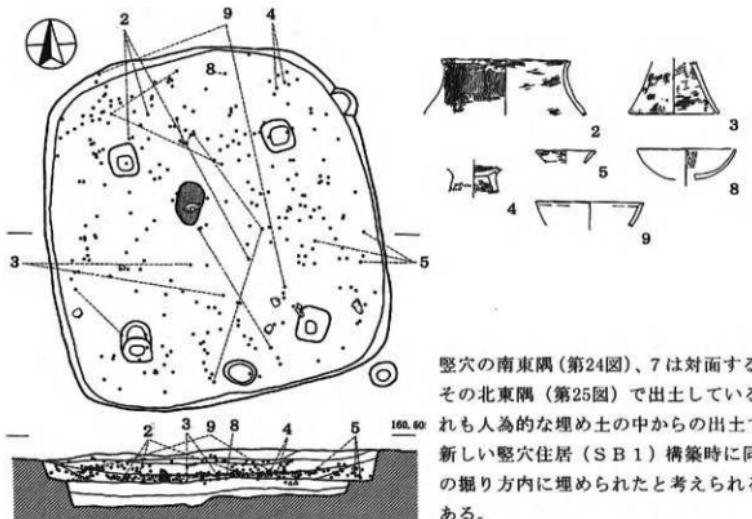
古墳時代前期の集落については、竪穴住居5軒、掘立柱建物1棟、溝1条が調査されているが、遺構の数の割に出土遺物の数は多くない。一定の数を出土しているのは、SB1、SB2、SB5であり、複数個体を図示することができた。ただし、完形品あるいはそれに近いものは、SB2出土の小型壺（第26図-12）、SB5出土の広口壺（第30図-20）だけであり、その数は多くない。さらに、全体の形状を直接的に窺うことができるものとしては、SB1出土の台付甕（第23図-1）やSB1の掘り方から出土している小型壺（第23図-6）を取り上げることができる。1は脚台部、6は胴下半をそれぞれ欠損しているが、いずれも意図的な破棄行為によるものである。特に台付甕の1は、胴部との接合部から比較的丁寧に脚台部以下を欠落させると共に、竪穴の機能停止に合わせてその床面に破片化させて、ばら撒いていることが確認されている土器である。

このように、これら以外の実測図として掲載した土器の多くは破片資料として図上で復元しているものが多い。ここでは、それぞれの土器について解説を加えることにする。細かいデータについては土器観察表に記載し、主な特徴と型式の変化を中心に述べることにする。

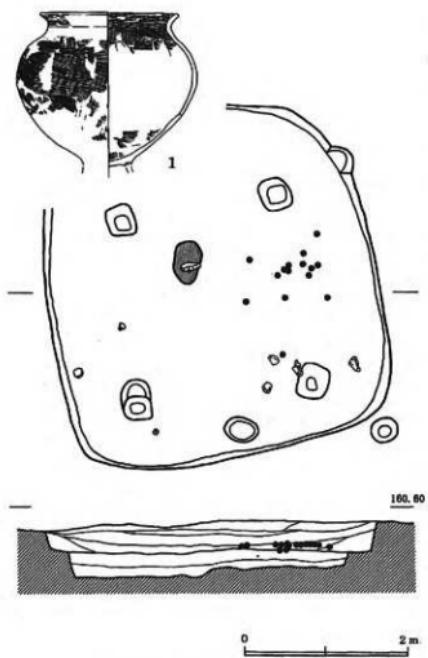
SB1（第22～25図）

SB1からは、その覆土中から拳大の礫と共に多量の土器片が検出されている（第22図）。そして、これらは覆土の最下層に集中する傾向にあり、SB1の竪穴住居が廃絶した後、初期の三角堆積が進行しその周囲がある程度埋まり出した段階に、故意にその窪地と化した竪穴に対して土器片をばら撒いている状況を示していると言える。土器の破片数は比較的多いものの、接合されて全体の形を窺い知れるものは、脚台部を失っている1の台付甕以外は認められないのもその廃棄行為の実体をよく表していると言える。1の出土状況を別図（第22図）として表しているが、竪穴の東側中央に集中する傾向にあり、すべての破片が覆土の最下層からの出土であることが分かる。これは、竪穴の東側から投げ込まれたものと考えられる出土を示しているおり、図では破片のまとまりをひとつの点として表現しているが、本来その土器破片は数多くに破碎された状況で出土している。これに対して、3の台付甕の脚台部や9の高杯坏部破片は、広い範囲の中での接合資料であり、やや1とはその出土状況の違いを示している。ただし、層位的には同じ層からの出土であり、よく似ていると言えるものである。

1～5と8・9は、この覆土中の土器群に含まれるものであるが、6と7は、古い竪穴住居であり、この住居の掘り方に相当する部分からの出土遺物である。掘り方からほとんど遺物の出土は認められなかったが、この2点は壁際から底面よりやや浮いた状況で出土している。6は

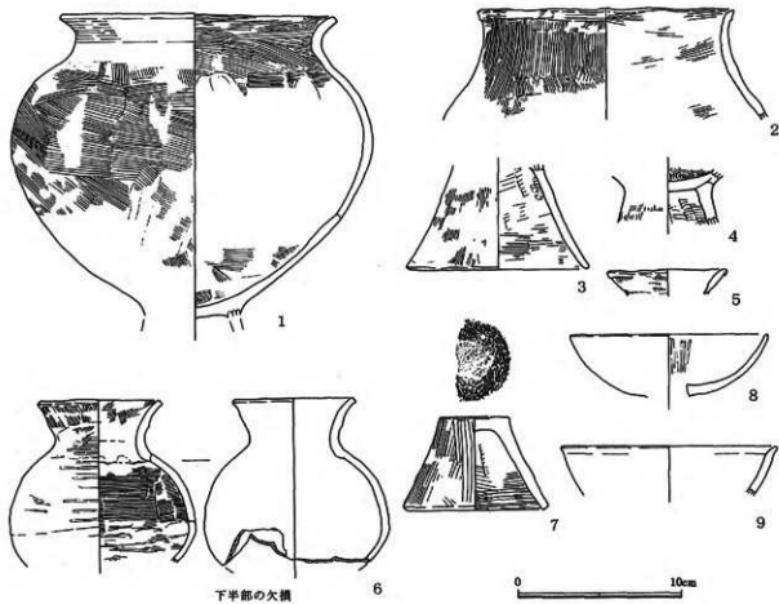


竪穴の南東隅(第24図)、7は対面するようにその北東隅(第25図)で出土している。いずれも人為的な埋め土の中からの出土であり、新しい竪穴住居(SB 1)構築時に同時にその掘り方内に埋められたと考えられるものである。

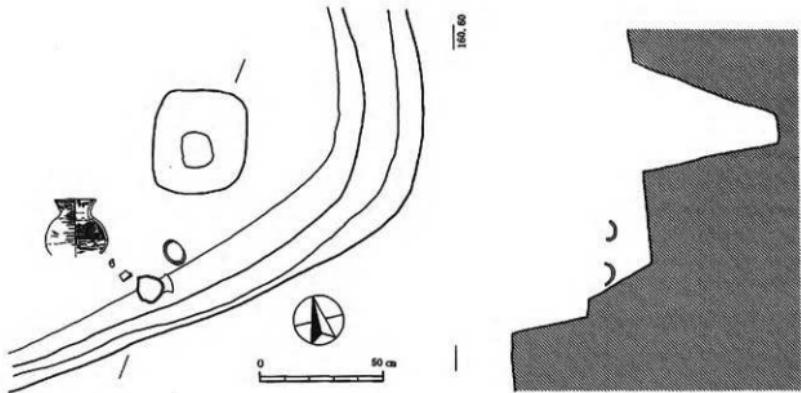


第22図 SB 1 遺物出土状況

1は、弥生時代後期に在來の系譜を辿らない台付甕である。口縁部はその頸部が強く曲がりやや鉤の手状を示し、胴部上半が明瞭な肩部を形成しながら張りの強い胴部を形成している。口縁外面をヨコナデしている平縁である点も特徴的である。口径16.4センチメートル、胴径21.8センチメートルを測る。2は特異な甕の口縁部破片で、口縁端部内外面を面取りするようにヨコナデし、その先端を尖らせてている。頸部はその外面に対して幅広くタテハケを施し、緩やかに大きく曲がる。3・4は台付甕の脚台部破片である。3はハケ整形の脚台部であり、その中位からやや大きく広がる「八」の字状を示す。5はやや粗製の小型甕の口縁部破片で、端部の折り返しが部分的に認められるものである。口径は、7センチメートルほどを測る。覆土中の遺物は、これらの他に8・9の小型高壙が出土している。8はその内面に丁寧なタテミガキが残る精製品で、壙部に稜を持たない椀状を示し、口径12センチメートルほどを測る。9は、その口縁端部内面に非常に弱い面取りが確認できるもので、器厚がやや厚い。8より粗製の感がするが、両者とも赤彩が確認される。



第23図 SB 1 出土遺物



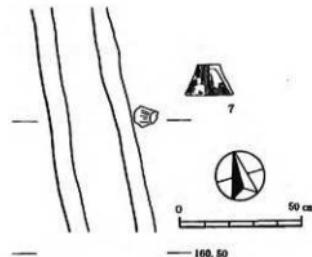
第24図 SB 1 No. 6 出土状況

6は、胴下半部を欠損する口径7.1センチメートル、胴径11.3センチメートルを測る小型壺である。頸部の屈曲と肩部の張りが明瞭で、球胴に近い胴部を示すものである。これは口縁部内面から外面全域に亘って赤彩が認められると共に、スヌの付着がその内面を中心見られ、火を受けた状況が観察されるものである。7は、台付壺の脚台部によく似た台で、全体の3分の1程度が残るものである。台の受け部(面)は、ドーナツ底に類似してその中央が窪む。底径は8.3センチメートル、器高5.7センチメートルを測る。

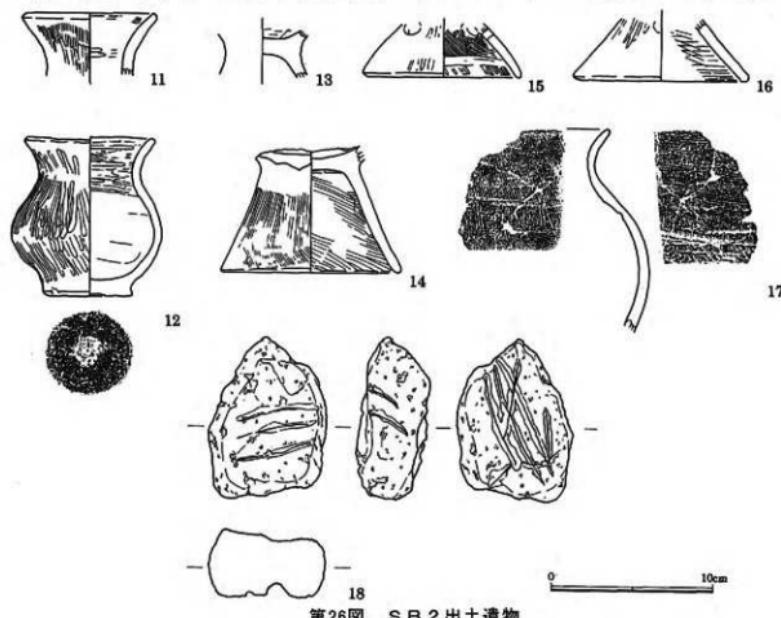
10は、軽石製の石製品で、現状の長さ1.8センチメートル、幅0.9センチメートル、厚さ0.7センチメートル、重さ0.7グラムを測る。小破片のため用途は分からぬ。「浮子」か。

S B 2 (第26・27図)

今回の調査では、もっとも大きな竪穴住居であるS B 2は、ほぼ全域に亘ってその覆土中か



第25図 S B 1 No. 7 出土状況



第26図 S B 2 出土遺物

ら土器片が出土している。土器は186点の数を数えるが、全体の器形を窺えるのは、12の小型壺だけである。

11、12は小型壺で、12は完存している。11は口縁部の小破片であり、その推定口径7.7センチメートルを測る。12は住居の北西隅の壁際から出土している。口縁部を上にしているものの横倒しの状態で、床面からやや浮いた位置で検出されている。これは、口径7.3センチメートル、底径5.3センチメートル、器高9.7センチメートル、胴径9.0センチメートルを測り、その底部がドーナツ底を示している。口縁部内面ヨコミガキ、口縁から胴部外面タテミガキで仕上げられている。13、14は、台付壺の脚台部である。14は12の小型壺の近くで、12と同じように壁際で横転して出土している。それぞれは互いの出土位置から相関性が指摘できそうな状況にある(第27図)。14は台付壺の脚台部として完存であるが、その割れ口は摩滅している部分が目立つもので、一定の期間この形で使用されたようで、台付壺から台へと転用されたと捉えることができるものである。用途の具体例はよく分からぬが、12と組み合わせて使用された可能性も指摘できるものであり、器台としての用途を考えることができそうである。これは原則的にはハケ調整で仕上げられているが、外側の上位はナデ整形されており特徴的である。

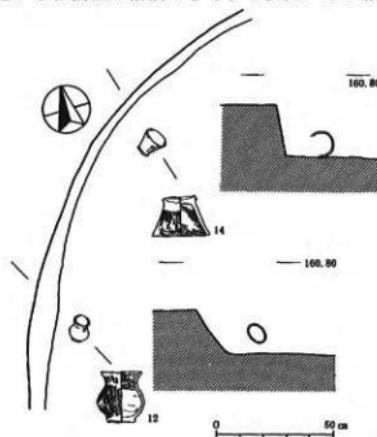
15、16は、高壺の脚部破片である。15は外側タテミガキ、内面ナナメハケメ調整が残り、円孔透かしが認められるもので、内側気味に開き、推定9.2センチメートルの底径を測る。

17は台付壺の破片資料で、外側ハケメ、口縁部内面ヨコハケメ、胴部内面横位の板ナデ調整が認められる。外側のハケメは胴部が横、口縁部が縦の方向であるが、胴部から口縁部の順で施されており、その上、口縁部のタテハケメは下方から上方に向かって施される。

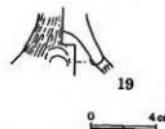
18は、軽石製の石製品である。長さ9.5センチメートル、幅7.0センチメートル、厚さ4.1センチメートル、重さ91.8グラムを測る不整の五角形を示す。表裏両面と側面に溝幅0.4~0.5センチメートル程度の溝が不鮮明ながら8条程度認められるものである。有溝砥石の一種であろうか。

S B 3 (第28図)

S B 3は床面の大半が擾乱を受け消失しているため、竪穴住居の生活に直接関わる遺物の出土は認められていない。19は竪穴の掘り方から出土した小型高壺の脚部破片であり、円孔透かしが4個開けられている。脚部は途中から大きく外反するようで、円孔透かしが施される辺りから開く角度に変化が認められる。外側はタテミガキにより仕上げられている。



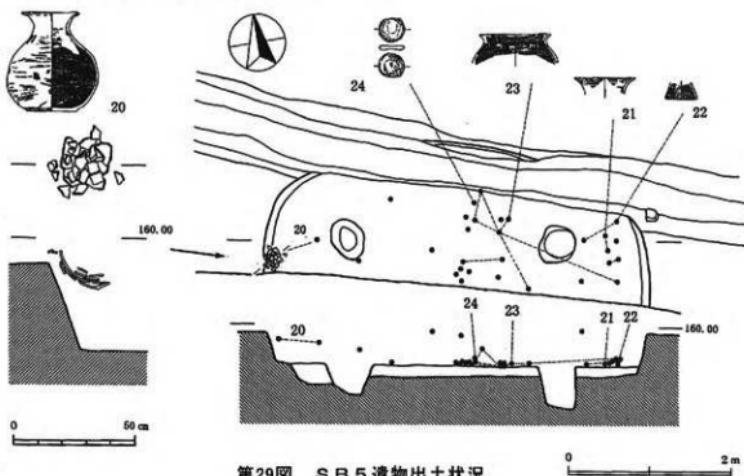
第27図 S B 2 No.12・No.14出土状況



第28図 S B 3 出土土器

S B 5 (第29・30図)

S B 5 は S D 1 と重複関係にあり、S D 1 より前出の堅穴住居である。この堅穴は、人為的に一気に埋め戻されていることが覆土の様子から観察されているが、それは S D 1 の構築に伴う埋め戻し行為として捉えることができるものである。そのため、出土遺物はその行為に係るものとして考えることができるわけであり、それぞれはレベルの上下による時間の差がないものとして理解できるものである（第29図）。

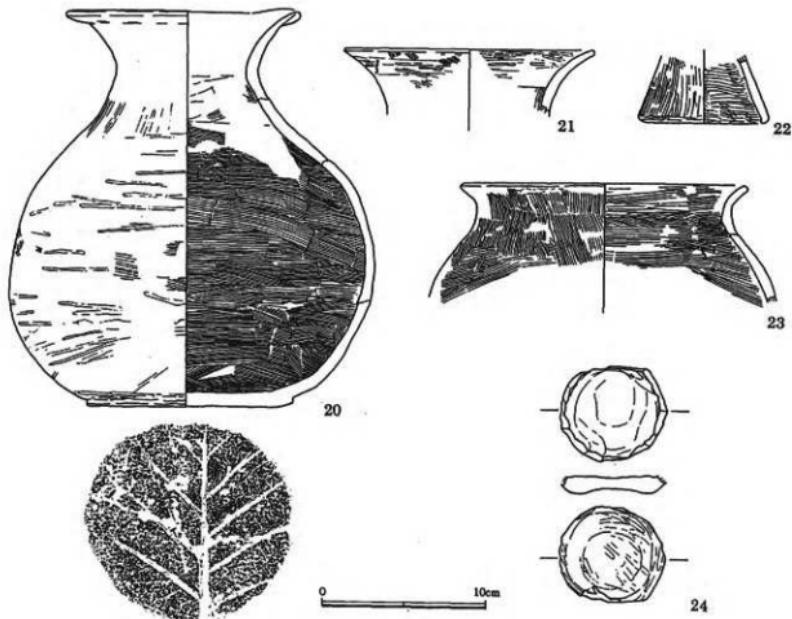


第29図 S B 5 遺物出土状況

出土遺物は、一括の塊として出土している20の折り返し口縁壺以外、破片化して堅穴の床面付近を中心に出土している。その中で、23の台付甕口縁部破片のように接合する破片が堅穴の東側で広い範囲に分布し、レベルの違いも示している事例もあり、住居の廃絶時の状況をよく反映しているものもある。

20は口縁部の一部を欠損するものの、ほぼ完形の折り返し口縁壺で、口径13.7センチメートル、底径12.5センチメートル、器高24.6センチメートル、胴径21.8センチメートルを測る。これは堅穴の東側壁際からの出土で、覆土の上位に位置して発見されている。横倒しの状態で上から土圧により押し潰されたような状況を示している。本来は完形の状態で廃棄されたものであろうか。型的には、通常の壺より頸部の短い短頸壺の一群に分類される壺であるが、弥生時代後期には、それほど出土例がないもので古墳時代前期に一定量の出土が確認されるものである。この土器自体は特徴的な幅広の底部から球形気味に展開する胴部に広口で不明瞭な折り返し部が形成される口縁部が付されるものである。胴部から頸部にかけては2段に屈折しているが、これは弥生時代後期にその波及が確認される菊川式土器の単純口縁壺に認められるもので、この段階までその影響が残ることが分かる。口縁部外面タテヘラミガキ、胴部ヨコヘラミガキで仕上げられ、胴部内面には丁寧なヨコハケメが見られる。

21は単純口縁壺の口縁部破片で、内外面の赤彩が認められる。22は台付甕の脚台部破片、23は台付甕の口縁部破片、それぞれは胎土がよく似ており同一個体の可能性がある。24は、その



第30図 SB 5出土遺物

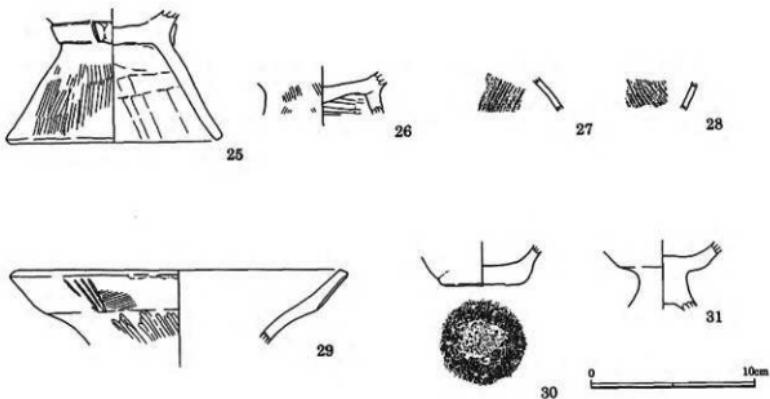
外面にススの付着が顯著なよく使い込まれた台付壺で、頸部内面にハケメの方向を違えることにより作られた明瞭な稜を認めることがあるものである。内外面とも丁寧なハケメ調整で仕上げられている。外面は口縁タテハケメ、胸部ヨコハケメが認められるが、これは前述の1と同じように胸部から口縁部の順で施されている。ただし、口縁部に対するタテハケメは、上方から下方に向かって施されており、1との違い示している。

24は壺の底部破片で、円盤状を示している。具体的な使用法は分からぬが、土器から土製品への転用が考えられる規格的な円形の破片である。割れ口の磨耗はそれほど進んでおらず、接合部できれいに切断して円盤状にしている。これはドーナツ底の壺底部を転用しているもので、外面に相当する部分はヘラミガキにより仕上げられ、内面はナデ整形されている。大きさは径 6.5×5.7 センチメートル、厚さ1.1センチメートル、重さ39.4グラムを測る。

S D 1 (第31図)

30は、SD 1の覆土中から出土して壺底部破片である。ドーナツ底を示すもので、内外面ともナデ整形を確認できる。SD 1からの出土遺物は、その長さに較べてそれほど多くない。ある程度器形の推定されるものは、この30の破片資料だけである。

以上遺構出土資料として記述したもの以外には、竪穴住居出土遺物のうち住居と直接関係ない時代のものとグリッドまたは中近世以降の土坑から出土した土器、陶磁器破片と石器である(第31図・第32図)。25、26は台付壺の脚台部である。25は脚台部と胸部の接合部分に粘土帯を



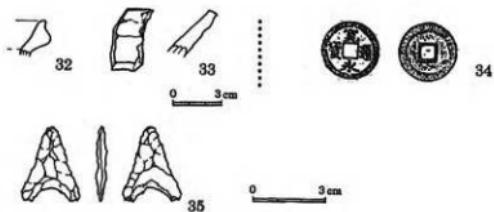
第31図 出土土器

回しており、西遼江との関連が窺えるものである。27、28はS字甕の胴部破片で、条線の深く鋭いハケメを見ることがある。29は赤彩の複合口縁壺の口縁部破片で、複合部に4条以上を単位とする棒状の刺突文が見られるものである。これは複合部と頸部との境が不明瞭で、複合部が大きく外方に傾く特異な形態をしめすもので、単純口縁壺の口縁部を基調としてその端部に幅広の粘土帯を付加することで複合部を造作している。31は小型高壺の脚部破片であり、壺部に稜が形成される。

33、34、35は、SB3の調査中に検出されたものである。32は瀬戸・美濃産の攝鉢で、大窓期のものであろう。16世紀前半に比定される。34は江戸銭貨で「寛永通宝」である。比較的残存状況が良い。35はホルンフェルス性の石鎧で、凹基無茎鎧に分類される。先端及び基部の端部をそれぞれ欠損しているが、全体の形状はよく分かる資料である。現状で長さ3.1センチメートル、幅2.3センチメートル、厚さ0.4センチメートル、重さ1.9グラムを測る。

33は表採の陶磁器片で、瀬戸・美濃産の攝鉢体部破片である。短辺側の片方がよく揃れており、破片を砥石等に転用して使用され

たものと考えられるものである。長さ4.0センチメートル、幅2.0センチメートル、厚さ0.9センチメートル、重さ9.4グラムを測る。



第32図 出土遺物

No.	器種器形	口径 器高 底径	特徴	調整	備考
1	台付甕C	16.4	胎土 きめがやや粗く、長石、赤色砂粒を含む。 色調 にぶい褐色 焼成 普通	外面ヨコ・タテハケメ(9本/cm)、 口縁部ヨコナデ 内面部口縁部・底部ヨコハケメ	脚台部欠損 外面スス付着
2	台付甕	(15.8)	胎土 きめがやや粗く、長石、砂粒が目立つ。 色調 にぶい褐色 焼成 やや硬質	外面ヨコ・タテハケメ(5本/cm)、 口縁部ヨコナ 内面部ヨコハケメ→ヨコナデ	口縁部1/4以下 外面スス付着
3	台付甕	(10.7)	胎土 きめがやや粗く、石英、長石、砂粒を含む。 色調 (外) 灰黃褐色 (内) にぶい褐色 焼成 やや硬質	外面タテハケメ(10本/cm) 内面部ヨコハケメ(5本/cm)	脚台部1/3存
4	台付甕		胎土 きめがやや粗く、長石、砂粒が目立つ。 色調 (外) 橙色 (内) にぶい褐色 焼成 普通	外面タテハケメ(7本/cm)、接合部ナデ押 内面部ヨコハケメ 文様	接合部1/2存
5	短頭甕	(7.0)	胎土 石英、長石、黒色砂粒を含む。 色調 黄褐色 焼成 やや軟質	外面タテハケメ(9本/cm) →ナデ 内面部ヨコハケメ 文様	口縁1/4存 小型甕の口縁部? やや粗製の折り返し口縁
6	短頭甕B	7.1	胎土 きめは細かく、長石、黒色砂粒が目立つ。 色調 (外) 橙色 (内) にぶい褐色 焼成 普通	外面胴部ヨコミガキ、口縁部タ テハケメ→ヨコナ (7本/cm) 内面部ヨコハケメ、口縁部ヨ コハケメ→赤彩	脚下半欠損、小型 甕 外面→口縁内面赤彩 内外面スス付着
7	台	4.2 5.7 8.3	胎土 きめが粗く、石英、長石、砂粒が目立つ。 色調 にぶい褐色 焼成 やや硬質	外面タテハケメ(5本/cm)、 内下面半ヨコハケメ、上半ヨコ ハケメ→ナデ	1/3存 受け部中央瘤む 二次加熱?
8	小型高坏	(12.1)	胎土 長石、1mm大の小石を多量に含む特異なもの。 色調 橙色 焼成 普通	外面 内面部ミガキが残る。	1/4以下小破片 赤彩土器
9	小型高坏	(13.2)	胎土 1mm大の砂粒の混入が目立つ。 色調 橙色 焼成 普通	外面 内面部口縁部弱い面取り	1/4以下 赤彩土器

第3表 土器観察表①

No.	器種器形	口径 器高 底径	特徴	調整	備考
11	広口甕C?	(7.7)	胎土 きめがやや粗く、石英、長石、赤色砂粒を含む。 色調 橙色 焼成 普通	外面 タテハケメ(8本/cm) →タ ミガキ 内面部 ヨコハケメ→ヨコハケメ	口縁部1/4以下 小型甕
12	短頭甕B	7.3 9.7 5.3	胎土 きめがやや粗く、石英、長石を含む。 色調 (外) にぶい橙色～黒褐色 (内) にぶい橙 色～褐灰色 焼成 普通	外面 タテミガキ 内面部 口縁部ヨコハケメ→ヨコミ ガキ	完存 小型甕、ドーナツ 底
13	台付甕		胎土 ややきめが粗く、石英、長石、砂粒を含む。 色調 (外) にぶい褐色～灰褐色 (内) 灰褐色 焼成 普通	外面 ナデ 内面部 ナデ	接合部全周
14	台付甕	10.6	胎土 きめが粗く、石英、長石が目立つ。 色調 (外) にぶい橙色～にぶい赤褐色 (内) 赤 褐色 焼成 やや硬質	外面 ナナメ・タテハケメ(6本/ cm) 接合部ナデ 内面部 ナナメハケメ(4本/cm)	脚台部完存 残存 高7.8cm 台付甕脚台部→台 に転用? 接合部側丸口が壊耗
15	高坏	(9.2)	胎土 ややきめが粗く、長石、砂粒を含む。 色調 橙色 焼成 普通	外面 タテミガキ 内面部 ナナメハケメ(10本/cm) → 脚部ナデ	脚部下半1/4存 円形透かし 1×4 ヶ所
16	高坏	(10.9)	胎土 石英、長石、砂粒が目立つ。 色調 橙色 焼成 普通	外面 タテミガキ 内面部 ヨコハケメ	1/4以下小破片 円形透かし
17	台付甕C		胎土 きめが粗く、砂粒を多く含む。 口縁部タテハケメ(7本) 色調 にぶい褐色～黒褐色 焼成 普通	外面 脚部ヨコハケメ→ 内面部 脚部イタナデ、口縁部ヨコ ハケメ	脚部下半ナデ

第4表 土器観察表②

*器種分類は淹戸遺跡(富士宮市教委1997)
分類に準じる。

No.	器種器形	口径 器高 底径	特徴	調整	備考
19	小型高杯		胎土 きめはやや粗く、石英、長石、砂粒が目立つ。 色調 橙色 焼成 普通	外面 タテミガキ 内面 ヨコナデ	接合部全周 円形透かし 1×4 ヶ所 SB 3出土
20	短頸壺A	(13.7) 24.6 12.5	胎土 きめは細かく、石英、長石を含む。2~3mm の大の小石が目立 色調 (外) 橙色 (内) にぶい褐色~黒褐色 焼成 普通	外面 口縁部タテミガキ、胴部ヨ コミガキ 内面 口縁部ヨコミガキ、胴部ヨ コハケメ (8本/cm)	口縁部2/3欠損 胴部外面スッ付着 底部木葉痕 SB 5出土
21	広口壺	(14.7)	胎土 きめは細かく、長石、黒色砂粒を含む。 色調 橙色 焼成 普通	外面 タテハケメ→ヨコミガキ 内面 ヨコハケメ→ヨコミガキ	口縁1/4以下 赤杉土器 SB 5出土
22	台付甕	(7.5)	胎土 きめは細かく、石英、長石を含む。 色調 にぶい褐色 焼成 普通	外面 タテハケメ (7本/cm) 内面 ヨコハケメ SB 5出土	脚台部下半1/4以 下
23	台付甕C	(16.7)	胎土 長石、黒色砂粒の細かい粒子が目立つ。 色調 (外) にぶい褐色~褐色 (内) 橙色~に ぶい褐色 焼成 普通	外面 脚部ヨコハケメ (7本/cm) → 口縁部タテハケメ 内面 ヨコハケメ	口縁部1/4以下 外側スッ付着 SB 5出土
24	円盤?		胎土 石英、長石、小石の混入が目立つ。 色調 (外) 黒褐色(内) にぶい橙色 焼成 やや軟質	外面 ミガキ 内面 ナデ	壺→土製円盤転用 6.5×5.7cm ドー ナツ底 SB 5出土
25	台付甕	(12.3)	胎土 石英、長石、小石の混入が目立つ。 色調 (外) 暗灰色(内) にぶい橙色 焼成 普通	外面 タテハケメ (5本/cm)、接合 部粘土帯 内面 ヨコナデ	脚台部1/4以下 接合部粘土帯 H-5出土
26	台付甕		胎土 石英、長石、赤色砂粒を含む。 色調 (外) にぶい褐色(内) 橙色~にぶい褐色 焼成 普通	外面 タテハケメ (6本/cm) 内面 ヨコハケメ	接合部1/3存 F-5出土
27	台付甕A		胎土 きめは細かく、1mm大の石英が目立つ。 色調 にぶい黄橙色 焼成 やや硬質	外面 ナナメハケメ (5本/cm) 内面 ナデ	S字甕 G-5出土
28	台付甕A		胎土 きめは細かく、1mm大の石英が目立つ。 色調 にぶい黄橙色 焼成 やや硬質	外面 ナナメハケメ (5本/cm) 内面 ナデ 文様	S字甕 SK 出土
29	広口壺A	(19.6)	胎土 きめは細かく、石英、長石、砂粒を含む。 色調 橙色 焼成 普通	外面 類部タテミガキ、複合部ヨ コハケメを残す。 複合部縦線の棒状刺突文 内面	口縁部1/4以下 赤杉土器 O-2出土
30	壺	5.1	胎土 きめはやや粗く、長石、砂粒の混入が目立つ。 色調 (外) にぶい橙色~褐灰色(内) にぶい橙色 焼成 普通	外面 内面 ヨコナデ	底部充填、ドーナ ツ底 小型壺? SD 1出土
31	小型高杯A		胎土 きめはやや粗く、石英、長石、砂粒の混入 が目立つ。 色調 橙色 焼成 普通	外面 内面	接合部充填 表面の磨耗が目立 つ。 H-5出土
32	擂鉢		胎土 きめが細かく、石英が目立つ。 色調 にぶい赤褐色 焼成 硬質	ロクロ成形	瀬戸・美濃産擂鉢 口縁 SB 3出土
33	擂鉢		胎土 きめが細かく、石英が目立つ。 色調 にぶい赤褐色 焼成 硬質	ロクロ成形	瀬戸・美濃産擂鉢 破片 割れ口一辺磨り痕 SB 3出土

第5表 土器観察表③

第V章 まとめにかえて

—集落の構成とその変遷—

1. 出土土器の編年的位置

この調査では、堅穴住居が5軒、掘立柱建物1棟、溝1条などが発見されており、SB1やSB5などから複数の土器が出土している。ここでは、それぞれから出土している土器群についてその時間的な位置付けについて少し考えてみることにする。

近接するSB1とSB2では、それぞれ小型壺が出土しているが、相互に型式差を認めることができる。口径が胴径と大きく違わないSB2出土の12に較べて胴部の張りが大きくよく発達し頸部の屈曲がはっきりしているSB1の6は、明らかな型式差と認識される。内彎志向が認められる15の高坏脚部は、やはり古い型式的な要素として捉えることができる。それに較べて1の台付壺が、口縁部ヨコナデにより仕上げられ、胴部が大きく張り出すものであり、9の高坏における口縁端部の面取りが不明瞭になる点は、比較的新しい型式的な属性として捉えることができる。それは、その小型壺の型式差とも整合することであったり、時間的な差として捉えることができるわけである。

このように、堅穴住居の中では古い段階に位置付けられ、第1次調査で発見されている8メートルを超える堅穴に次ぐ数値を測る大型住居であるSB2は、小型壺と弥生時代にその系譜を辿らない高坏の存在から大邱I式期に比定できるものと捉えている。

SB1については、掘り方中から出土している小型壺と台と覆土中から出土している他の土器類とに厳密な時期差があり、堅穴構築時のものと廃絶時のものとに分けて考える必要がある。つまり、1の台付壺と6の小型壺及び7の台との時間差を考える必要があるわけである。同時に、6と7についてはSB1の古段階の堅穴住居が廃絶した段階にも対応するわけである。

SB1は6の小型壺の型式より大邱II式期にその新段階の堅穴住居が建てられたものと考えられ、1の台付壺が対応して同じ大邱II式期の中で廃絶していると捉えられるものである。

SB5では、台付壺と壺の共伴例が知られる。この住居は、SD1と重複関係にあり、それよりも古いことが覆土の状況から確認され、SD1の構築に際してか、あるいはそれ以前に意図的に埋められている様子も認められている。一連の遺構覆土の状況から、出土土器はSD1掘削時以前の段階のものとして捉えることができるが、その掘削時にSB5の埋設が行なわれたとすれば、その時の土器群として捉えることもできるものであり、SD1あるいはその掘削作業との関連をも想定できる出土状況を示していると言える。

台付壺の23は、弥生時代以来の在来系型式の中で捉えられるもので、口縁部の屈曲がよく発達しており、肩部の張りも目立つものである。特に、口縁部内面は、ハケメ方向とその順序を違えることにより明瞭な稜線が形成されており、口縁部と胴部が明確に区分できるようになる。時間的には、頸部の屈折が不明瞭で口縁部がやや間延びするSB2の17を一番古相として、同型式で頸部の屈折が認められるようになる23の例、さらに口縁部ヨコナデといった異系統の技法が指摘されるものの口縁部の屈曲が明瞭で、胴部がよく張っているSB1出土の1の順で新

しくなることが今回の調査資料では言える。つまり土器型式からは、SB2→SB5→SB1の順で新しくなることが指摘できそうである。

また、SB5出土の短頸壺20は折り返し部不明瞭な造作をする特異な型式であるが、弥生時代後期雌鹿塚I式期より沼津市域の雌鹿塚遺跡や御幸町遺跡などの海岸部の遺跡を中心にその出現が明らかになるが、一定の量が特にこの富士山西南麓で確認できるのは、大崩式期に入つてからのことである。

その他グリッド出土遺物では、25の遠江系の台付甕脚台部が目に付くが、これは、その型式的な特徴から欠山様式西遠型（鈴木1991）との関連が窺えるものである。欠山様式の台付甕の場合、脚台部と胴部の接合部分に粘土帯を持つものと持たないものがあるが、これは、この粘土帯を持つ例であり、このような関連が窺われる例としては、雌鹿塚II式期の尾崎遺跡（沼津）第1号住居址の良好な一括資料の中のものや形骸化しているものの大崩II式期の御幸町遺跡（沼津）260号住居址出土例などをあげることができる。在来系土器群の中に西遠江の影響が散見される事象が確認できるわけである。

西遠江あるいはややその範囲を広げて東三河辺りまでの影響は、弥生時代後期の雌鹿塚II式期に顕在化する。山木遺跡（芦山）に見られる広口壺・長頸壺や中島西原田遺跡（三島）の広口壺・高坏などから分かるように、狩野川流域で数量的に多くはないものの山中様式（鈴木1991）の影響が窺える土器類の出土が認められる。それは、弥生時代後期に西遠江～東三河の土器が相模川流域に移動する広域的な土器移動の動きと時間的に整合するものである。ただし、その内容は大きく異なり土器の移動形態から神奈川県綾瀬市神崎遺跡などのように集団の移動が想定され、在地の土器様式にも大きな影響を及ぼす相模川流域の状況に対して、狩野川流域では客体的なものでしかない。

雌鹿塚II式期は、泉遺跡第1号溝や滝戸遺跡SB26などで確認された菊川式土器の影響が窺える壺、高坏、台付甕などの出土からも分かるように、弥生時代後期の中で顕著に外来系土器の交流が明らかになる段階として位置付けることができるが、それは駿河湾を介しての菊川式土器ばかりではなく、さらにその西側の西遠江～東三河との関連も十二分に指摘することができる出土状況を示していると言える。

その土器交流が一段と顕著となり、北陸や瀬戸内海沿岸地域まで広域に広がり出すには、丸ヶ谷戸遺跡の第1次調査竪穴住居跡02出土土器がシンボリックに表すように大崩I式期以降のことである。この広域的で多元的な土器交流の中で、25の土器の出現を位置付けることができるるのである。

この25と同様にグリッド出土土器である30の壺は、底部の中央が窪むドーナツ底を呈しているが、同様の例は7の台の受け部、12の小型壺、24の壺転用の円盤などでも確認できることで、目立った出土を示している事が分かる。この事例については第1調査においても4例が報告されており、一定の数を占めるようであり、月の輪上遺跡で確認する限り弥生時代後期までは遡らないものであると言える。

このドーナツ底については、一様に小型壺の底として使われることが多いようである。これについては、底部の製作技法や製作工程から畿内第五様式の土器を特徴付ける成形技法の一つである底部輪台技法（都出1974）との関連が想定されるものである。ただし、畿内では壺を中心とする技法であるのに対して小型壺に採用されるその形式の違いやこの小型壺がこの技法と密接な関係にある分割成形技法やタタキ成形との相関性が認められない点などから考えると直

接的な関係は薄いようである。それに対して、この底部成形技法は東海西部の広口壺や直口壺の中に山中～欠山様式を通して普遍的に見られる点は注意される。これと前述の第五様式の土器との関係についてはよく分からぬが、同一の器種として壺に採用されているのは東海西部との親縁性を考慮しなければならないのかもしれない。いずれにしても、外来の新しいこの技法がどのような理由で小型壺に採用されたかは分からぬものの、小型壺が弥生時代後期後半からその数を増やし、古墳時代前期に盛行する中で、古墳時代になってから確認できる特徴的な底部の成形技法である点は指摘できるものである。

(1) 台付壺のハケメ

S B 1 と S B 2 では台付壺の口縁部を 3 個体図示しており、さらに S B 5 の例を含めるといふ合計 4 個体になるが、それぞれには時間差が存在しており系統や型式の違いを容易に見て取れるものである。その中で、口縁部から胴部に対するハケメ調整については一定に共通性を認めることができる。型式差を越えて一様に胴部横位の後、口縁部縱位の順でハケメが施されているわけである。このことは、第一次調査時出土の台付壺についても指摘できることで、報告書掲載のもので検討対象となる 3 個体すべてについても共通している。そして、これらはその内面の調整として、全面にヨコハケメを施すものと口縁部および胴下半に対してそれを施すものとの 2 種が認められる。

この事象を胴部→口縁部を技法 1 、口縁部→胴部を技法 2 として、他の遺跡についても検討してみると、丸ヶ谷戸遺跡と同じ水系にあり、その下流に位置する上石敷遺跡では、22 個体の台付壺が報告されており、その中で検討対象となる口縁部→胴部の部分が残る 9 個体の台付壺のうち、技法 1 が 7 個体、その逆の技法 2 が 2 個体確認することができる。この前者が圧倒する事例は、丸ヶ谷戸遺跡の台付壺の状況とよく似ていると言え、古墳時代前期大席 I ～ II の段階に技法 1 が盛行していることが分かる。これに対して、弥生時代後期雌鹿塚様式の集落遺跡である月の輪上遺跡では、報告書掲載のなか検討対象となる台付壺 16 個体の内、胴部ハケメ→頸部あるいは口縁部のハケメのものが 6 個体、逆に胴部ハケメを最終的に施すものが 10 個体確認でき、それぞれ一定の数が認められるものも後者が多い状況が指摘できるものである。

ハケメを施す行為は、壺の器面を整えることと形を整えることの 2 つの作用が働くが、それを施す順序が土器の各部位によって違えるのは後者がその原因となる場合が多い。弥生時代後期から古墳時代にかけて煮沸形態の主流は台付壺であるが、それは胴部の球形化を目指し、口径に較べて胴径が徐々に大きくなる漸次的な変化を示している。そのため、頸部の屈曲が大きくなり肩部の張りが強調されるようになる。この型式変化に呼応して頸部の屈曲に対する仕上げが、最終段階の調整として行なわれるようで、頸部に対する細かい形を造作する技法として捉えることができるものである。台付壺の弥生時代から古墳時代前期にかけての型式変化の中で、ハケメ技法の変化は技法 1 の相対的な増加として弥生時代以来の伝統的な手法の潜在的な変化として捉えることができる。そして、その技法を施す型式の増加が、古墳時代へ移り変わった時代の変化に対応していると見なされる。

(2) 台の変化

その多くは、小型鉢として報告されことが多かった台については、近年、台盤状土器（森1996）の名称で、本来の機能面から再検討の必要が説かれ、ものを載せるための用途が考えられるものが比較的多いことを指摘されている。そして、それに答える形で、御幸町遺跡の報文（沼津市教育委員会1998）では、意識的にその器種の抽出を図り、弥生時代後期に台が相当数存在する実体について報告されている。

駿河の場合、この台については弥生時代後期から古墳時代にかけての確認例があり、台付壺が煮炊きの主体を占める段階にも使用続けられることが分かる。弥生時代中期の平底壺と台（台盤状土器）との組み合わせが煮沸形態に供する性格とは別の機能を考えなくてはならないものであるが、今回、S B 1 の掘り方から出土した土器類では、その出土状況に同時性から小型壺とこの台との組み合わせを想定している。そうなれば器台のような器を載せる機能を指摘することができるものと考えられる。

そして、この台になると思われる類例を時代ごとに示したのが第33図である。その数が少なく型式変化を正確に表しているとはいひ難いが、大まかな変化を見て取ることはできそうである。

月の輪上遺跡例は、内外面ともハケメ調整で仕上げられているやや粗製の台であるが、器高が受け部の径に較べて低い横広のものである。類例は、御幸町遺跡に類似する形態のものが数例報告されている（沼津市教育委員会1998）。外面および内面は比較的粗雑に作っているが、受け部の上面は丁寧なナデ整形が施されている。

大席段階に入つて確認される台は、今回に調査で S B 1 より出土している台付壺脚台部の破片である。内外面との台付壺の脚台部同様にハケメ整形を施している。受け部上面の状況から、成形時は上下逆さにしていることが推測され、本来ドーナツ底の小型の鉢を作るのと同じ製作工程を辿るものである事が分かる。この大席 II 式期の台は、受け部径が小さくなることと、その器高が受け部径に較べて高くなることを特徴とするが、それは、台として載せる器種の底部の変化に対応するとともに、さらに台を高くすることにより載せるもの自体を視覚的に誇張する作用が働いていたように思われる型式的な変化を遂げている。そして、確認できる大半の台の受け部径は比較的小さいこの S B 1 から出土している台については、丸ヶ谷戸遺跡例より小振りなものであるが、三新田遺跡 A17号住居址出土例がその類例として上げられる。

この台も大席 II 式期以降、器台の出現と共にその機能の転換が図られることによりその必要性がなくなり、消失していくようで、月の輪平遺跡など古墳時代前期後半の土器群を主体とする遺跡では見られなくなる。

(3) 短頸壺の変遷と土器編年

S B 5 から出土している短頸壺に関連して、その型式変化と土器編年を組み、S B 5 を中心とした遺跡の時間的な位置づけについて考えてみることにする。今回の調査で出土している土器群をもって型式組成を検討するとなると、それほどどの数量や種類があるわけではない。同型

雄鹿塚 III



月の輪上 53住

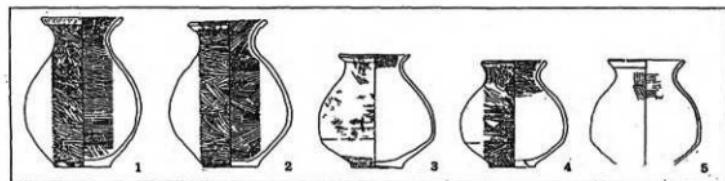
大席 II



丸ヶ谷戸 S B 1

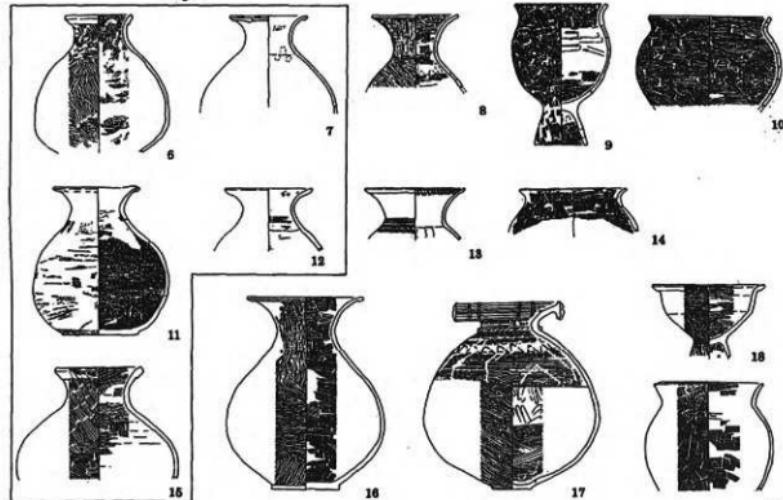
第33図 台の変化

雌鹿塚



大
廊

I



大
廊

II



0 20cm

1・2 鶴串町遺跡 SD-1 3・4 雌鹿塚遺跡 13号住居址
5月の轟上遺跡 6 北仲戸平遺跡 18号住居址
7~10 北仲戸平遺跡 SB451-A 11~14 丸ヶ谷戸遺跡 SB5
12~15 月の轟上遺跡 79号住居址 15~19 鶴串町遺跡 260号住居址
20~24 北仲戸平遺跡 SB452 25~29 平田の田邊林 SD21001

第34図 短頭壺の変化とその共伴土器

式の短頸壺を含む土器組成と比較することで土器の型式組列を検討し、その位置づけを探ろうと思う。第34図に示した土器編年図は、弥生時代後期雌鹿塚式期から地域型のS字甕(原田1996)がS字甕B類(赤塚1991)をモチーフとして出現して、古墳時代前期土器様式の中で大きな両期が訪れる大席田式期以前までを対象としたものである。そして、SB5出土の短頸壺の型式変化を基軸にして構成した土器編年図である。

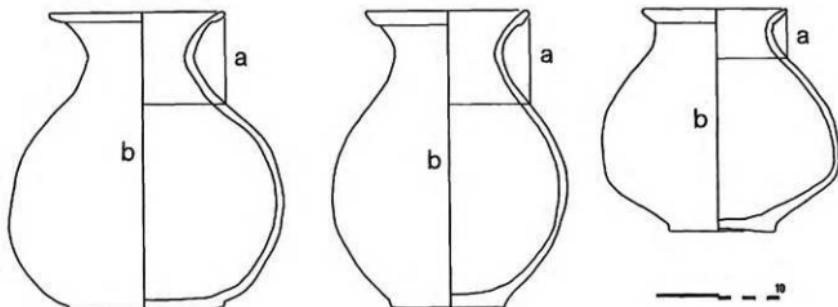
なお、短頸壺は第35図に示したaの値が概ね器高の1/3以下の数値を表しているものを広口壺の中で短頸壺として分類している。

雌鹿塚段階については、それぞれ型式差を持つものであるが、代表的な短頸壺を一括して提示してある。1・2は御幸町遺跡SD1出土土器であるが、SD1は時代幅がある土器が混在して発見されている溝で、明らかな時間設定ができない土器群で構成されているため、これについても底部が広くその胴最大径を下位に持つ長胴気味の胴部である点などから雌鹿塚II～III式期の幅を持って捉えられるものである、折り返し部分が断面長方形であり厚くない点が特徴的である。この短頸壺は雌鹿塚遺跡第1号土坑出土例からも分かるように雌鹿塚I式期にその出現が明らかとなる(註1)。

3～5は何れも第4図に示したaの値が器高の1/4に満たない非常に頸の短い壺である。現状では、3点すべて雌鹿塚IV式期のものであるが、これは大席田式期以前には消失しているようで、雌鹿塚IV式期だけの型式として捉えられる極めて特異な短頸壺である。系譜としては1あるいは2にそれを辿ることができ、それらから型式分化して出現したものであると考えられる。

これら短頸壺の内、1や2の系譜を引いて大席田式期になると、口径に較べて胴部のよく発達した6・7の出現が認められるようになる。これらは第35図aの数値の縮小化と胴径の相対的な増加が大きな特徴として指摘できる。折り返し部が前段階同様に断面長方形で比較的薄く粘土帯を貼付する点は、この型式の共通の属性として指摘できる。6・7に関連する共伴土器としては、10の内外全面をハケメ調整する台付甕を特徴的型式として取り上げることができる。

弥生時代後期後半には、台付甕の内面の口縁部をハケメ整形し以下胴部をナデ整形で仕上げるか、胴部下位にハケメを残し胴部がナデ仕上げされるかのいずれかの調整技法が主体をしめるようになる。この段階の標識的な土器群である月の輪上遺跡の溝出土の台付甕は、すべてこの調整法で占められている。ところが、大席田式期になると内面全面に対してハケメを残すものが一定の量を示すようになるが、10はその型式的な変化の中で捉えることができるものである。



第35図 短頸壺の型式

短頸壺は、6→11→15の順で大廟I式期にその型式変化を辿ると考えられる。それは、胴部最大径が徐々に上位へ移るのに従い、肩部の発達が促されることから口縁部の屈曲が急になる一連の変化として捉えることができるものである。その変化の中で、11や12で認められる極めて不鮮明な折り返し部を作成するものは、富士山西南麓の類例であり、それぞれに微妙な地域差を表しているようである。

今回の調査で出土している11は、上記のように大廟I式期の中で捉えることができるものである。ただし、その頸部に認められる弱い屈折については、菊川式土器の二次的な影響が残っていることを考えなければならないのかも知れない。

11・12の短頸壺に対して共伴する土器群としては、13の口縁部下端に弱い稜を持つ折り返し口縁壺や前述のハケメ調整の順序に違いが認められる台付壺の14などが取り上げられる。13については、この地域の弥生時代にその系譜を辿れない波状文と横線文が口縁内面および頸部～肩部に施文される特徴的な土器であるが、今回の調査で出土している接合部粘土帯を有する第31図-25の台付壺脚台部同様に、その文様自体は遠江からの影響が考えられるものである。

15は御幸町遺跡260号住居址出土の短頸壺である。この住居址からは、良好な土器一括資料が知られるが、中には17の口縁部を東海系のパレススタイル壺、胴部を畿内系の庄内壺からそれぞれ借用したような特異な壺も含まれている。また、ここからは、有鉄銅釦の出土も知られており、遺跡の中ではその特異性が際立っている住居であると言える。

短頸壺は、大廟II式期になると20や25のように口縁部の短頸化が進み、胴部の大きさが強調されるようになる。急なカーブを描く頸部から、その端部がそれに合わせて大きく外傾する20とそれがあまり開かない25に分けて捉えることができるが、短頸化の進行と胴部球胴化への指向が型式変化の顕著な過程であることからは、20→25への変化が想定される。ただし、両者で認められる変化の度合いは小さくそれほどの時間差は感じ得ない。なお、20の出土している北神馬土手遺跡は愛鷹山中腹の遺跡であるのに対して25は狩野川下流黄瀬川扇状地内の遺跡であり、大きくその立地を違えている。その立地の違いが間接的に作用して、保有する土器形式にも違いを示す東駿河特有の土器様式を成立させているが、このような「山の土器」と「平地の土器」の違いが現れるのもこの大廟式期の前半I・II式期段階のことである。

20と共に共伴する土器は、球形の胴部から大きくラッパ状に広がる折り返し口縁部が付く21の広口壺や内外面全面にハケメが残る台付壺の22や24などである。台付壺は两者とも口縁部の屈曲と胴部の張りが目立つもので、比較的口縁部（頸部）の幅を広く作るものである。同じ台付壺である23は、その系譜を外に求められる外来系土器のひとつとして捉えることができるもので、長胴気味の胴部に鉤の手に屈曲する口縁部が付されている。口縁部はその端部が面取りされ、その部分に対して刺突文が施されている。今回の調査でS B 1出土の台付壺同様に遠江～三河辺りの影響が想定されるがいずれの例もその変容が進み、オリジナルとは大きな違いを示している。

この20の短頸壺を含む北神馬土手遺跡 S B 452の一括資料に対して後続する25の短頸壺を含む平田前田遺跡 S D 21001出土土器群では、25の短頸壺以外はすべて外来系土器であり、弥生時代にその系譜が辿れないもので占められている。平田前田例が幅1.8m、深さ1.2mを測るやや大型の構の覆土中層からの出土である点を考慮しなければならないが、その土器組成に大きな違いを示す事象は、短頸壺の間で大きな型式差が認められない事実から、そこに時間の大きな違いがないものと見なされる。確かに広範囲に亘る調査が進んでいる愛鷹山麓では、外来系土器の

搬入はそれほど好調ではないのに対し狩野川流域の葦山城内遺跡など田方平野の拠点集落である山木遺跡周辺を中心として外来系土器の出土が目立つようである。これと同じような状況として、前方後方形周溝墓が発見されているこの丸ヶ谷戸遺跡の周辺も外来系土器の搬入が顕著な地域として扱うことができる。つまり東駿河~伊豆にかけて土器の形式組成が大きく違うことにより、大席Ⅰ・Ⅱ式期段階には大きな二つの地域割りができるわけである。ただ、この土器相の違いは、一概に遺跡立地あるいはその生業の違いからは導き出せるものではない。北神馬土手遺跡と丸ヶ谷戸遺跡は、ともに水田可耕地が周辺であまり期待できな山間地に位置しているのである。

そして、愛鷹山麓の集落が終焉を迎えるS字甕が主体を占める富士山麓と「く」の字甕がその主体となる狩野川流域とに2極分化することによりこの状況が払拭されるのは、煮沸形態の大きな転換期である大席Ⅲ式期になってからのことである。

大席Ⅱ式期の標識的な一括資料である平田前田遺跡SD21001からは、25の短頸壺の以外に短頸壺、S字甕、「く」の字甕、高坏、小型鉢の共伴が知られる。26は口縁端部を垂下して幅広の端面を作る折返し口縁壺の一種である。短頸の口縁部及び断面三角形の折り返し部など特異な型式の壺であり、垂直の明瞭な面取りと球形肩部が特徴的である。

この段階には27のS字甕からも分かるように、そのB類中段階(赤塚1991)の共伴が知られる。また、同じ東海西部との関連がある有稜高坏の28と29は、28が坏部・脚部の内彎傾向や口縁端部面取りなど原型の型式的特徴をよく残すものに対して、29は内彎傾向が薄れ、脚部も八の字状に大きく開くものであり本来の有稜高坏の型式からは大きく逸脱するものである。東海西部系の高坏(有稜高坏)が各部位に対してその内彎する意識が薄れるのは、このようにこの大席Ⅱ式期からであり、その型式変化は瀬戸内海より先行している。原則的に弥生時代後期に高坏を保有しない雌鹿塚様式は、八兵衛洞遺跡C-9号住居址や丸ヶ谷戸遺跡竪穴住居跡02や前方後方形周溝墓出土の高坏の搬入をシンボリックな現象として大席様式の成立とともに終焉を迎える。そして、その高坏は、いち早く大席Ⅱ式期にはその変容が始まり、在地化が完成される。この在地で完成された地域型の高坏は、大席Ⅳ式期まで独自の変化を辿り、屈折脚高坏の出現に呼応して消失するが、29はこの地域型の型式として捉えられる在地の高坏である。

以上が丸ヶ谷戸遺跡SB5出土の短頸壺に基づく土器編年で、その短頸壺の型式変化を基軸として構成したものである。この編年からは、型式組列の変化とともに副次的な結果として愛鷹山麓の弥生時代~古墳時代の集落とこの丸ヶ谷戸遺跡を中心とした富士山麓の諸遺跡との時間的な併行関係が理解できるわけである。そして、両者の土器様式における外来系土器搬入比率の違の中で、愛鷹山の諸遺跡にそれが極めて少ない状況からは、愛鷹山麓で大規模な展開を示す集落が「山のムラ」として極めて特異な形態と多様な生業に支えられていた様子を窺うことができるわけである。

そして、その状況は、富士山麓の拠点的な集落の一角を占めていた丸ヶ谷戸遺跡に対する同じ富士山の西麓に展開する標高660メートルの長者ヶ原遺跡における古墳時代前期集落の状況にも類似するのである。

(渡井)

2. S B 6 の形態

今回の調査においてS B 6が検出されたことにより、これまで報告されたものと合わせて当市の弥生時代後期から古墳時代前期の掘立柱建物跡は17例（第36図）となった。そこで、市内の掘立柱建物の展開と形態について若干の検討を試みたい。

現在の資料において市内で掘立柱建物の構築の開始が認められるのは月の輪上遺跡で7棟（A地区4棟、B地区3棟）の掘立柱建物跡が検出されている例である。この遺跡は月の輪遺跡群の中央より南側一帯を占め、市南部の潤井川湿地帯に面する丘陵の台地上に位置し、調査年次によって地点が異なるため、北をA地区、南をB地区としている。そのB地区より確認された掘立柱建物跡（1～3）は、3棟とも 1×2 間の形状を呈しており、東西と南北の棟向きは異なるものの集落内において規則的な間隔を保持した列を見出せることから同一規格の建物であったことが想定され、報告において高床式倉庫の可能性を認めている。柱穴の径は平均して約70センチメートル程度で、深さはいずれも約60センチメートルを測る程度であった。3棟の梁行と桁行の規格の比率は1:1.2～1:1.4に適合する。

また、これより北へ200メートルほどの地点のA地区では4棟の掘立柱建物跡が確認されている（4～7）。4の掘立柱建物は他の建物跡より離れた地点に位置し、柱穴が4基しか検出されていないが、柱穴の径は平均して60～70センチメートルで、深さが32～55センチメートルを測り、前出の1～3の建物跡とほぼ同一規格の六本柱が想定されている。5、6、7については相互に遺構が集中して林立し、規格はいずれも1:1の正方形に近い形態をしている。各柱穴の規模も径が約60センチメートルで、深さが60センチメートル程度（5の中央の柱穴のみ30センチメートルと浅いことから棟もち柱のような支柱穴ではないかと考えられている）と類似しているが、これらの相違点を示すと5だけが六本柱であること、7だけが円形の柱穴であることが指摘できることから、同じく月の輪上遺跡にある西側に構築された4棟の掘立柱建物跡のグループとは異なる、各々に独自性をもった建物跡であったことが想定される。

また、同時期の掘立柱建物跡が滝戸遺跡でも2例確認されている（8・9）。この遺跡は、市南西部の羽船、星山丘陵の接点で潤井川によって形成された堤防状台地に位置する。ここでの2例のうちのひとつ（8）は、3基の方形状の柱穴が規則的に並列した状態から、掘立柱建物跡としている。この建物跡は雌鹿塚I式期（弥生時代後期）に比定される竪穴住居跡と重複し、これより新しい遺構であると報告されている。柱穴の規模は65～80センチメートルで、深さは約20センチメートル程度であった。9は円形の柱穴からなる六本柱で、 1×2 間の形状を呈しており、柱穴の径は平均して65センチメートル前後で、深さは20センチメートルを測る。桁行と梁行は1:1.2の規格に適合する。

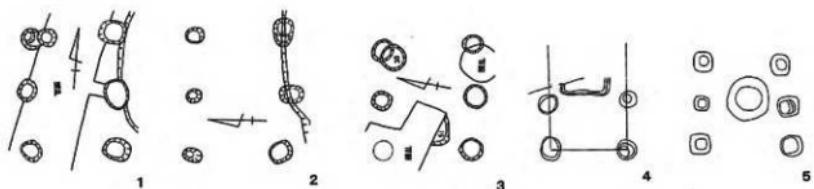
ここまでが弥生時代後期のこの地域の土器編年でいう雌鹿塚様式期に相当する掘立柱建物である。 1×1 間が2例と 1×2 間が7例ということで、基本的に 1×2 間を主流としており、小規模な柱穴によって構築されていたと見受けられる。

同様に古墳時代前期に相当する土器編年である大廟様式期の例を見てみると、まず、南部谷戸遺跡の1例が挙げられる（10）。南部谷戸遺跡は市南部の星山にある月の輪遺跡群の北西の一画を占め、潤井川湿地帯との縁辺部に位置している。この遺跡では掘立柱建物跡として可能性のある3基の方形状のピットが二列に並列していると報告されているが、ここで改めてこの遺構を掘立柱建物跡としておきたい。この方形状の柱穴は径が80センチメートル、深さ60センチ

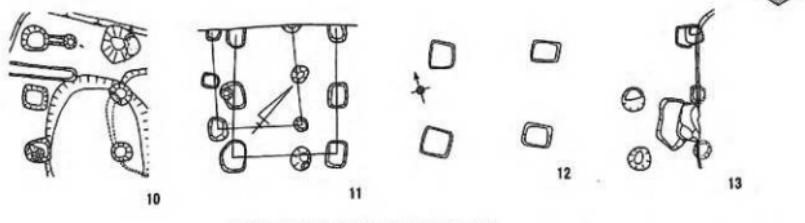
メートル規模の6基が 1×2 間で構成され、 $1 : 1.3$ (2.7×3.5 平方メートル)の規格に適合する。

権現遺跡では2棟の掘立柱建物跡が重複して確認されている(11)。遺跡は市東南部の潤井川とその支流である弓沢川の合流地を臨む富士山麓地形の連続した台地の裾にあたる緩斜面上に位置する。報告では、建物跡の規模の小さいほうを掘立柱建物跡Aとし、大きな規模のほうを掘立柱建物跡Bと分けて、建物跡Aは六本柱の 1×1.5 間の形状を呈している。柱穴は北列と南列で形状が異なり、北列は円形で径は40~50センチメートルで、深さは30~40センチメートル

雌鹿塚



大廓



- | | |
|------------------|-------------------|
| 1. 月の輪上掘立柱 2 1 | 2. 月の輪上掘立柱 2 2 |
| 3. 月の輪上掘立柱 2 3 | 4. 月の輪上掘立柱 6 1 |
| 5. 月の輪上掘立柱 6 4 | 6. 月の輪上掘立柱 6 2 |
| 7. 月の輪上掘立柱 6 3 | 8. 間戸 VSB 4 1 |
| 9. 間戸 II S B 2 0 | 10. 南部谷戸掘立柱 |
| 11. 権現掘立柱 A・B | 12. 間戸 IV S B 6 2 |
| 13. 月の輪平ビット群 | 14. 丸ヶ谷戸 S B 6 |
| 15. 月の輪平第1号掘立柱 | 16. 月の輪平第2号掘立柱 |

0 4m

第36図 富士宮市内掘立柱建物跡集成

程度を測る。南列の柱穴は方形状を呈し、径が50~70センチメートルで、深さ35~40センチを測る。もう一方の建物跡Bは1×2間の六本柱で、方形状の柱穴は径60~110センチメートルで、深さ20~50センチメートルを測る。建物跡Aの桁行と梁行の規格は1:1.2で、同じく建物跡Bの規格も1:1.2であった。なお、この重複する掘立柱建物跡の新旧関係は不明とされるが、後述する形態の違いから建物跡Aより建物Bのほうが新しい可能性があると考えている。

また、滝戸遺跡では前述の掘立柱建物跡とは別に1×1間の掘立柱建物跡が1棟確認されている(12)。この建物跡は雌鹿塚IV式期の遺構であると比定される方形周溝墓と重複し、これより新しい遺構であると新旧関係が明らかになっていることから、前出の掘立柱建物跡(8・9)とは時期差が生じている。柱穴の径は70~90センチメートルで、深さは30センチメートルを測る。桁行と梁行に代わる柱間の比率は1:1.1の規格に適合する。

月の輪平遺跡では3棟の掘立柱建物跡が確認されている(13・15・16)。遺跡は月の輪遺跡群の南西側で市南部の星山谷が蛇行し舌状に形成された河岸段丘上に位置する。報告では掘立柱建物跡は2棟あるとされてきたが、ここではもう1棟を掘立柱建物跡として追加しておきたい。13の建物跡は月の輪平遺跡の第6次調査で検出されたピット群で、掘立柱建物跡とする可能性も示唆されていた。1×2間の六本柱で、円形と隅丸方形が組み合わされた柱穴は、円形が60~70センチメートル、方形が30~50センチメートルで、深くて20センチメートル程度を測る。規格は1:1.7で、やや長細い形態となり、他に例をみない。15は1×1間の四本柱であった。柱穴は円形で、その径は約30センチメートルで、深さが30~40センチメートルを測る。柱間の比率は1:1.4の規格に適合する。16は住居跡内のピットを合理的に整理した結果、確認されたもので、1×1間が想定される柱穴のうち1基の柱穴を欠いている。柱穴は梢円形で長径60センチメートル、短径30センチメートルを測り、深さを知るためのデータは報告されていない。柱間の比率は1:1.2に適合する。2棟とも小規模な四本柱であるということで共通している。

本報告で確認されたS B 6(14)は、これまで例にあげた掘立柱建物跡にはない1×3間の八本柱の形状を呈している。柱穴はやや方形を意図し、径は23~45センチメートルで、深さは8~20センチメートルを測る。桁行と梁行の比率は1:2.1に適合する。これまでの例をみて知れるように1×3間の建物跡は市内で唯一の例となる。

市内の例のみで判断した場合、大廓様式期の掘立柱建物跡は、雌鹿塚様式期の例と比べて柱穴の規模が大きいことが挙げられ、形状は方形が主流であるように見受けられる。しかし、丸ヶ谷戸遺跡のS B 6や月の輪平遺跡の建物跡(15・16)の柱穴は規模が小さいため、高床式倉庫以外の上屋構造が想定できる特異な形態をもつ建物に関しては柱穴の掘り方に違いがあったのかも知れない。

それ以外の例でみると1×2間と1×1間がほぼ同じ割合で存続していることや、桁行と梁行の比率は雌鹿塚様式期の建物跡の系譜をそのまま受け継いでいるかのように、画期的な変化は見られなかった。これはこの地域における集落規模で弥生時代後期の掘立柱建物に關係したノウハウが古墳時代前期の様相を示しながら採用され活かされていたとも考えられる。

また、もうひとつの特徴として、雌鹿塚様式期では潤井川以南の星山丘陵付近の遺跡でしか認められなかった掘立柱建物跡が、大廓様式期に入ると、権現遺跡や丸ヶ谷戸遺跡でも認められるようになり、丸ヶ谷戸遺跡では前述のとおり特異な形態をもつ建物跡が出現したということとは、今後の集落構成などを考察する際に非常に興味深い資料といえる。

(小野田)

3. 集落の変遷

集落としての遺構は、堅穴住居と掘立柱建物、溝などが発見されており、それぞれは相互に関連している。時代的には、大廟Ⅰ～Ⅱ式期段階に収まり、明らかに弥生時代後期まで遡る構造物は存在しない。土器の編年的位置付けと遺構の重複関係から3つの段階を設定してその変遷を辿ることができる(第37図)。ただし、段階設定の大きな根拠となっている出土土器の大半は、遺構廃絶時のものであり、実際の遺構が営まれた時間を厳密には反映していないものである点は注意しなければならない。

段階1

この段階に比定されるものとしては、SB6の掘立柱建物を上げることができる。この遺構の特異性については、前項で述べたとおりであり、この地域では前時代にその系譜を辿ることのできない建物構造を示している。このSB6はその西側でSB2と重複関係にあり、それよりも古いことが分かっており、この集落では最も古い段階つまり段階1として捉えることができるものである。

このように、丸ヶ谷戸遺跡の開発が始まるのは、このSB6の段階からであり、その当初に特徴的な建物が建てられたことが分かる。そして、それは大廟Ⅰ式期段階のこととして捉えることができるわけである。このような、古墳時代になっての掘立柱建物の構築は、その複数の組み合わせから豪族居館の存在を窺わせるものであるあるが、今回の調査地点ではその展開は確認されていない。今後の周辺に対する調査成果に委ねられる課題である。

段階2

この段階としてはSB2、SB4、SB5の堅穴の長軸をほぼ北に取る堅穴住居群を取り上げることができる。これらは、丘陵縁辺に沿うように帶状に並ぶ住居配置を示すように見られるが、SB2の立替の事実や堅穴の廃絶状態の違いなどから相互の時間差が窺えるものである。ただ、その時間差は決して大きなものではない。これらの堅穴の内、堅穴の掘り込みがはつきり残るSB2とSB5については、SB5において全面、SB2において覆土の下層においてそれぞれ人為的な埋め戻し行為を執り行ったことが判明している。そして、この地区に対するこのような整地作業を経て、SD1のような溝が敷設され、集落構成として新たな展開を示すようになるわけである。

そして、この堅穴を埋め戻す行為は、前回の第1次調査時にも検証されている事例である。第1次調査区の西隅で発見された堅穴住居跡01は、今回調査されているSB5同様に人為的に埋め戻した痕跡が窺える堅穴住居である。この堅穴の場合は、埋め戻しによる整地作業の後、同じ場所に方形周溝墓が構築されており、集落が強制的に居住域から墓域へと転換している。つまり、丸ヶ谷戸遺跡での集落造営における大きな画期として捉えられるわけである。この大きな画期に伴う土地利用の変化は、全長26mを測る前方後方形周溝墓の造営を最大の目的とするわけであるが、近接して前述の方形周溝墓や長軸8.8mほどを測る墓に隣接した大型の堅穴住居(堅穴住居跡02)などもそれほどの時間差を持たないで構築されている。このように、集落の造営中に大規模な造成事業及び造墓事業が執行されていることは、その範囲もある程度の区域に及ぶものと考えられる。

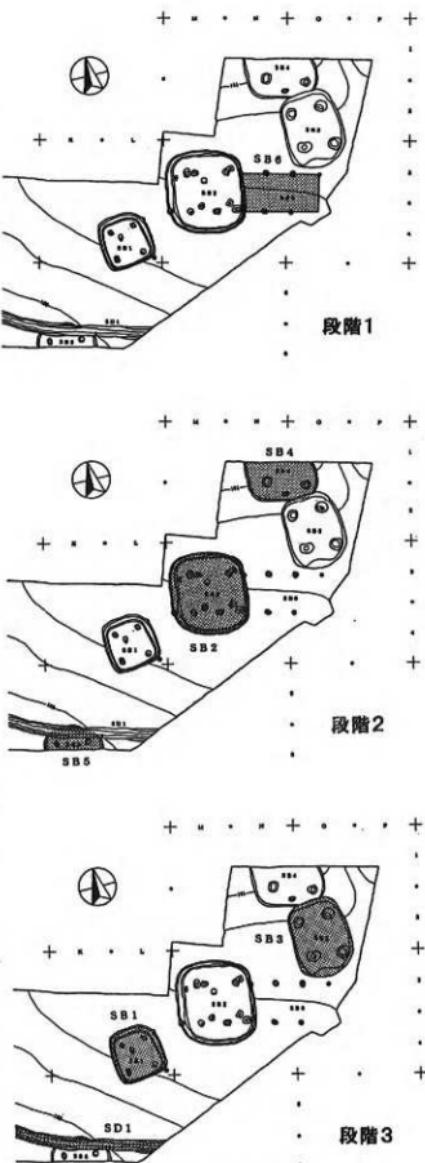
今回の調査地点と前回の調査地点とでは距離にして100mほど離れていることや関連する遺構・遺物が確認されていないことなどから、両地点の直接的な関係についてはよく分からぬが、今回の調査におけるSB5と第1次調査の堅穴住居跡01が埋め戻されている事実と互いの住居方位の類似性は、SB5の廃絶に伴うSD1の構築が堅穴住居跡01の廃絶に伴う方形周溝墓の構築と同じ事象として、この丘陵における造墓活動の一環であった可能性は極めて高いことを表すものと考えている。

掘立柱建物SB6が廃絶してから集落が大きな変革期を迎えるまでは、このように通常の堅穴住居によって構成されている集落の段階として、調査範囲内の状況からは捉えることができる。この段階を段階2とする。

段階3

第1次の調査区で盛んな造墓活動が行なわれている段階を段階3とする。この段階の遺構としては、SB1、SB3、SD1を取り上げることができる。そして、この段階に第1次調査のそれぞれの出土土器が接合関係にある前方後方形周溝墓、方形周溝墓、堅穴住居跡02が含まれるわけである。

段階3における集落の構成は、溝としての機能を有し開口しているSD1と堅穴住居の組み合わせとして捉えることができる。そして、それは前方後方形周溝墓側から、つまり丘陵内部からの視点では、溝の内側に堅穴住居が展開する集落遺跡と捉えることができる。これらの堅穴住居は、段階2のそれよりは長軸をやや東に傾ける建物方位を示している。その中で、平面形が方形に近いSB1の一辺は、SB3の短軸の長さとほぼ同じであると共に、第1次調査の墓に関連した施設と考えられる堅穴住居跡02の一辺のほぼ半分の長さを示し、さらに前方後方形周溝墓全長の1/6、方形周溝墓の1/3の数値に近い値を示してい



第37図 集落の変遷

る。これらは、互いに一定の基準に規制された規格的な構造物であったものと捉えることができ、堅穴住居については、それが墓と何らかの関連を持ちながら運営された建物群であったことが指摘できる（註2）。一般に方形周溝墓などの墓は、居住していた部分で造られる場合、居住域を潰して構築されることが大半でその逆はほとんど認められない（渡井1981）。ただし、丸ヶ谷戸遺跡の場合は、墓に関連すると思われる建物の構築がその造墓以後もつづいたようで、同じ区域で墓と堅穴とが共存している状況を指摘することができる。そして、ここではこの段階を段階3としているわけである。

以上のように、今回の調査で確認された遺構に対しては、3段階に分けて時間的な変遷を考えてみた。ところで、それらは第1で示した土器編年とどのように照らし合わせられるのだろうか。

大席式期における土器編年で述べたように、SB5はそこで出土している短頸壺の型式から大席I式期の前半の中で捉えることができるから、概ねSB5の含まれる段階2が大席I式期前半の時代設定ができる。SB5と同じ段階のSB2では、そこから出土している小型壺の型式から、その設定を考えることができる。

SB2と同様の小型壺が出土しているSB1は、その型式差からSB2より新しい段階のものであることが分かるが、小型壺のよく発達した球形に近い胴部の形態などから大席II式期に比定されるものと考えられる。SB1の場合、この小型壺と台は掘り方の出土で新しい住居構築段階に対応する土器であり、その他のSB1廢絶段階に対応する胴径が口径を大きく凌駕する台付壺や小型高杯などの土器群とは、時間差を持つものであるが、それらも大席II式期の範囲に収まるものと考えられる。段階3はそれらの出土土器からは、大席II式期を中心とした時代設定ができるものである。ただし、SB5を埋め戻し、SD1を構築するという時代的な事件性を考慮すると、その始まりは大席I式期の後半を当てられる。そして、この大席I式期後半の基準的な一括土器として、第1次調査の堅穴住居跡02及びその関連資料を当てることができるわけである。つまり、土器群の時間的な推移としては、SB2・SB5→堅穴住居跡02→SB1として辿ることができるのである。

出土土器のない段階1については、具体的な時間設定がよく分からぬ。その中で、この段階のSB6の形態的な特異性は、弥生時代のものと考えるより、古墳時代に入ってからの土器の移動に伴う人的な交流の中で出現した新しい掘立柱建物として捉えられるものと思われる。この段階は丸ヶ谷戸遺跡の開始に関わる段階として非常に重要であるが、このような視点から、それはすでに大席式期に入っているものと考えている。

《註》

1. 雄鹿塚遺跡第1号土坑の中には、大席式段階のものと見られる球胴気味の短頸壺が報告されているが、その出土状況から他の土器群より後出のものであることが知られる。このことについて池谷信之氏（沼津市教育委員会）より詳細なデータをご教示していただいた。
2. 第1次調査の報告では、前方後方形周溝墓などの規格を「尋」で算出しているが、今回の成果からはSB1の大きさである430～440センチメートルの数値が一つの単位として導き出され、古代尺の20尺（2丈）に近い長さに整合する可能性を指摘できるものである。

文献

- 鈴木敏則1991『梶子遺跡Ⅷ』財団法人浜松市文化協会
- 都出比呂志1974「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』20巻4号
- 森泰通1996「台盤状土製品から台付甕へーその変化と背景ー」『鍋と甕 そのデザイン』
第4回東海フォーラム
- 沼津市教育委員会1998『御幸町遺跡発掘調査報告書—遺物編（土器）—』
- 原田幹1996「S字甕の分布と地域型」『鍋と甕 そのデザイン』第4回東海フォーラム
- 赤塚次郎1991『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 富士宮市教育委員会1981『月の輪遺跡群』
- 富士宮市教育委員会1981『月の輪遺跡群II—月の輪上遺跡（B地区）—』
- 富士宮市教育委員会1994『月の輪遺跡群IV—月の輪上遺跡（B地区）—』
- 富士宮市教育委員会1997『滝戸遺跡』
- 富士宮市教育委員会1982『権現遺跡発掘調査概報』
- 富士宮市教育委員会1982『月の輪遺跡群III—月の輪平遺跡（第6次調査）—
—月の輪上遺跡（C地区）—』
- 富士宮市教育委員会1993『富士宮市の遺跡—富士宮市遺跡詳細分布調査報告書—』
- 渡井一信1981「IV南部谷戸遺跡の方形周溝墓について」『月の輪遺跡群』富士宮市教育委員会

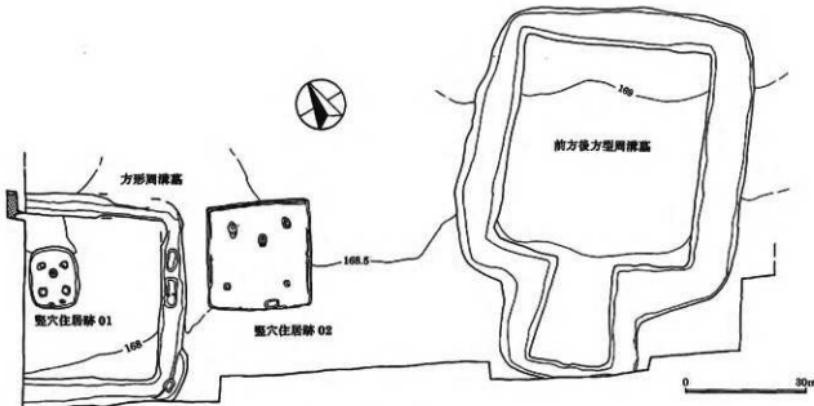
第VI章 おわりに

丸ヶ谷戸遺跡の第2次調査では、5軒の竪穴住居と1棟の掘立柱建物、1条の溝を確認した。当初は第1次調査の墓域(第38図)がここまで展開して、方形周溝墓などの墓の検出も期待されたが、今回の地点では確認されていない。古墳時代前期の集落は、上石敷遺跡や木ノ行寺遺跡あるいは權現遺跡など丸ヶ谷戸遺跡の南側に展開しており、丸ヶ谷戸遺跡を見上げる場所に立地している。その状況で盟主たる前方後方形周溝墓は、その景観を損ねることなく鎮座していたようであり、それら集落から可視できる位置に築かれたようである。そのため、この前方後方形周溝墓を集落から遮る墓の構築を許さなかったのであろう。

富士山麓の丘陵は原則的に緩やかな傾斜を示しながら、雑壇状の段を持ちながら数段に亘って形成され、その丘陵は、川筋や谷筋で大きく落ち込むことによって縦横に分断される。この丸ヶ谷戸遺跡はその雑壇の上段に築かれた墓域であり、その下段あるいは川によって分断される横の段の丘陵に集落を築いているようである。それら周辺の集落に住む人々が權威の象徴としてこの墓を見るために、この丸ヶ谷戸遺跡は選地されているわけである。それは、濃密な富士根地区の遺跡分布域のもっとも西側にこの遺跡が位置し、その遺跡地帯を広く見下ろすことができる立地環境からも指摘できることである。

この前方後方形周溝墓を中心とした計画的な造墓活動は、遺跡の動向からも窺えることで、集落經營の中での大きな変革を経てそれらが整然と築かれている様子が判明している。また、その墓が作られるのと同時に、第1次調査時でも確認されていることであったが、竪穴住居が同じ区域内に建てられる点も重要であろう。

弥生時代に一般の居住域と方形周溝墓により構成される家長層の墓域は、滝戸遺跡がそうで



第38回 丸ヶ谷戸遺跡第1次調査

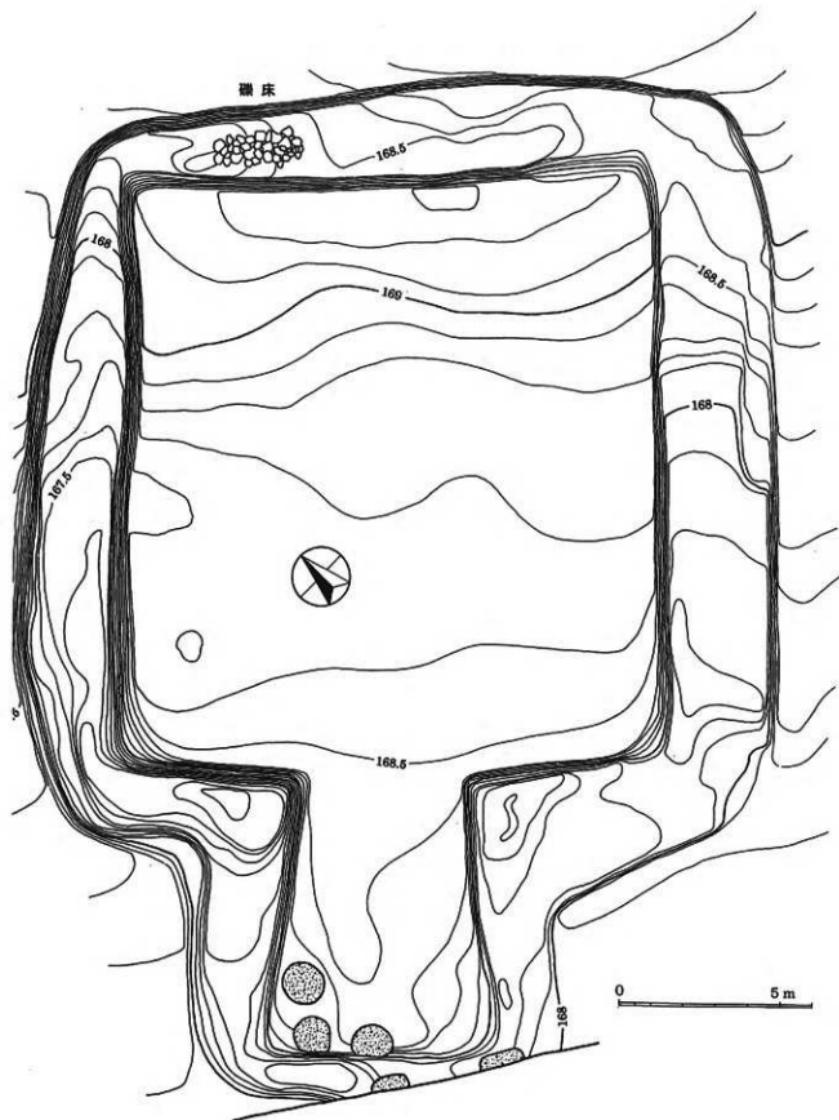
あるように、同じ丘陵上や隣り合う丘陵などでそれぞれがセットとなって築かれることが一般的であるが、大席Ⅰ式期以降になると群構成を示さない単独で造られる方形周溝墓が現われ、さらに丸ヶ谷戸遺跡のような明らかな階層性に基づく前方後方形周溝墓が出現し大きな墓制の画期を指摘できるようになる。この時代の変化の中で、墓自体と建物との相関する規格性や造墓する場所の選定については、弥生時代に認められる単位集団あるいは村落単位の墓域に対する規制を大きく越え、広域な地域を支配する首長による政治的な統制あるいは規制が大きく作用しているのであろう。今回の調査では、弥生時代に見られなかった墓制の新たな展開と確立する階層性の一端が判明したと言えるわけである。

前方後方形周溝墓の発見は、静岡県の古墳時代の始まりを考える上で極めて重要な出来事であった。その発見から10年ほどが過ぎて、同じ丘陵の南側を調査する機会を得た今回の調査では、また新たな事実が分かり、大きな成果を上げることができた。

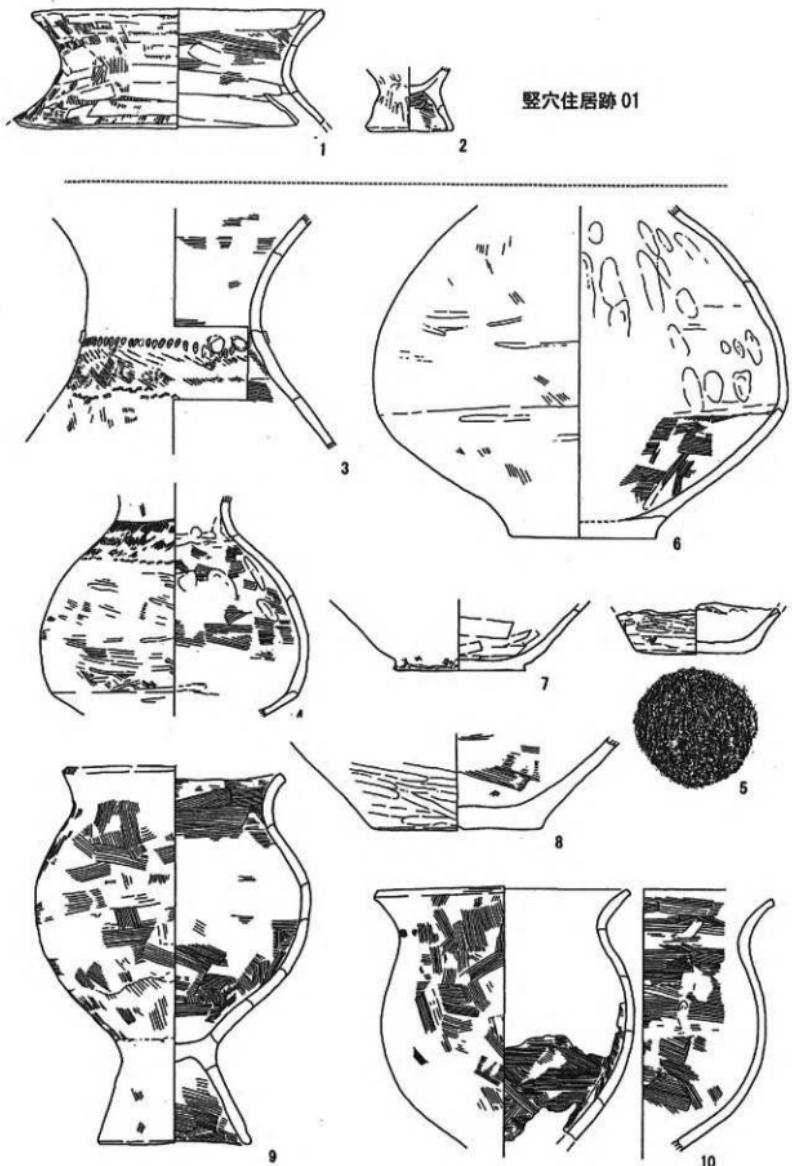
本遺跡の発掘調査に際しましては、ご理解とご協力を賜りました地権者の井出喜江氏や事業を担当された㈱クラストをはじめとした関係各位の皆様、また発掘調査から報告書の刊行までの一連の作業に従事していただいた調査補助員・作業員の方々に文末ながら記して感謝申し上げます。

《付録》

今回の調査で発見された遺構は、第1次調査で確認された前方後方形周溝墓等と関連をもつことが想定され、それは丸ヶ谷戸遺跡の構造やその集落の経営形態を考える上で重要な視点として捉えることができる。第39図～第43図には、第1次調査で発見された遺構・遺物を実測図として再録しておく。



第39図 第1次調査 前方後方形周溝墓

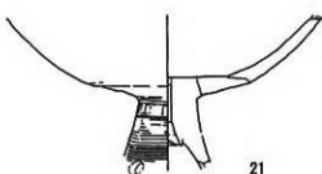
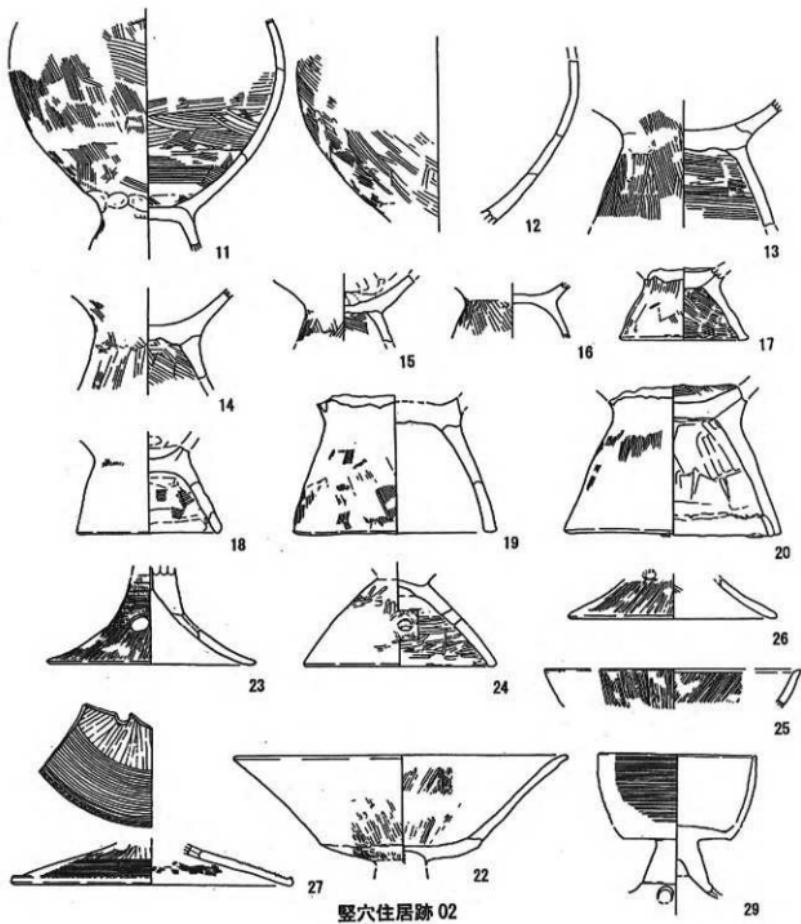


竪穴住居跡 01

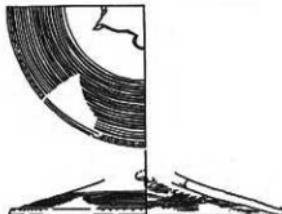
竪穴住居跡 02

第40図 第1次調査 出土土器実測図①

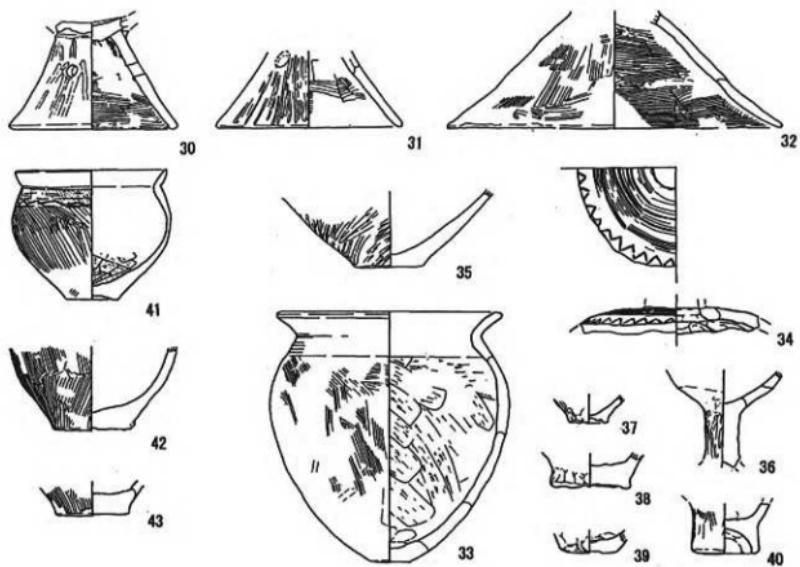
0 10cm



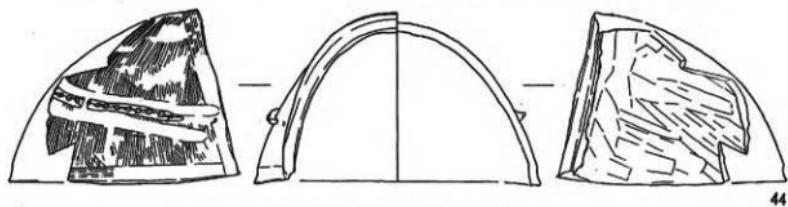
堅穴住居跡 02・前方後方型周溝基



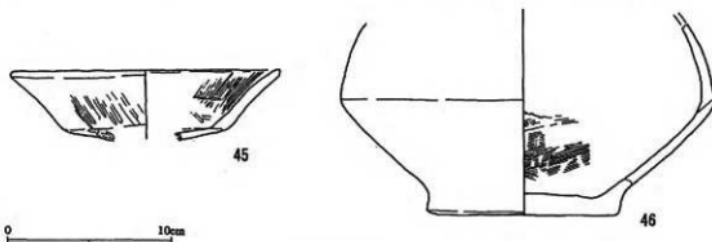
堅穴住居跡 02・方形周溝基



竪穴住居跡 02

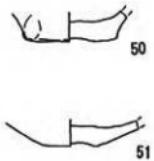
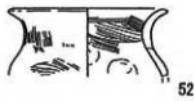


竪穴住居跡 02・方形周溝墓

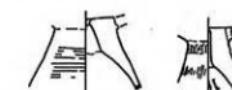
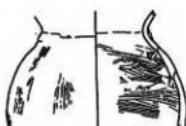
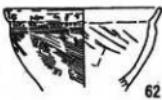
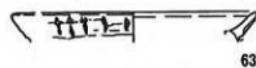
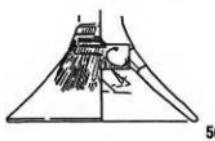
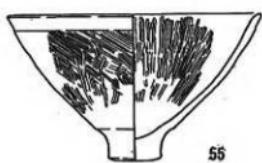
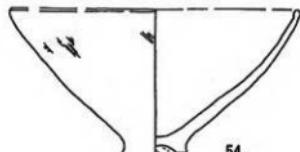
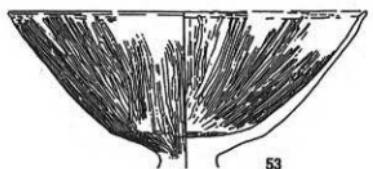


方形周溝墓

第42図 第1次調査 出土土器実測図③



方形周溝墓



前方後方型周溝墓



第43図 第1次調査 出土土器実測図④

報告書抄録

ふりがな	まるがやといせき 2							
書名	丸ヶ谷戸遺跡 II							
副書名								
卷次								
シリーズ名	富士宮市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第27集							
編著者名	渡井英蕃、小野田晶							
編集機関	富士宮市教育委員会							
所在地	〒418-8601 静岡県富士宮市弓沢町150 Tel.0544-22-1187							
発行年月日	西暦2001年10月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まるがやとい 丸ヶ谷戸 遺跡	ふじのみやし 富士宮市 おおいわあざ 大岩宇 まるがいと 丸谷戸	22207	市番号 3 9 県番号 富士宮市 8 3	35° 13' 45"	138° 37' 55"	2000.10.10 ~ 2000.12.07	952 m²	共同住宅 建設事業 のため
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
丸ヶ谷戸 遺跡	集落	縄文時代	堅穴住居 掘立柱建物 溝	石鏃		古墳時代前期の前方後方形周溝墓に 関わる集落遺跡の 発見。		
				5軒	壺、台付壺 小型壺他			
		古墳時代前期	1棟	1条				
		中近世以降	土坑 溝	29基 1条	陶磁器 寛永通宝			

富士宮市文化財調査報告書 第27集

丸ヶ谷戸遺跡Ⅱ

平成13年10月31日

編集 富士宮市教育委員会

発行 富士宮市教育委員会

〒418-8601

静岡県富士宮市弓沢町150

(0544) 22-1111㈹

印刷 三鷹美術印刷株式会社

〒418-0056

富士宮市西町1番15号

(0544) 26-3636㈹

写 真 図 版



遺 跡 遠 景

図版 1



A 遺 跡 遠 景

(南から)



B 調 査 地 区 遠 景

(東から)

図版2 調査区全景



A 調査区西側全景

(東から)



B 調査区東側全景

(南西から)

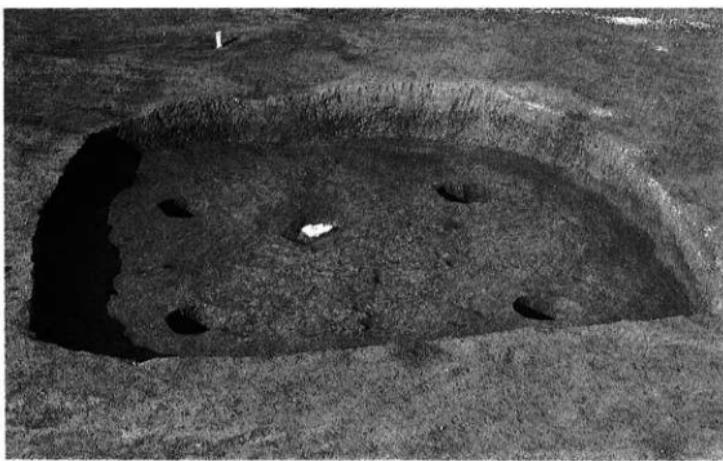
遺構

図版3



A 壇穴と溝

(南西から)



B SB1

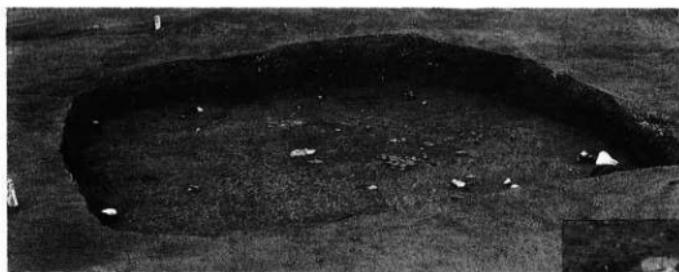
(南から)

図版4 遺構と遺物



A SB1 堀り方

(南から)



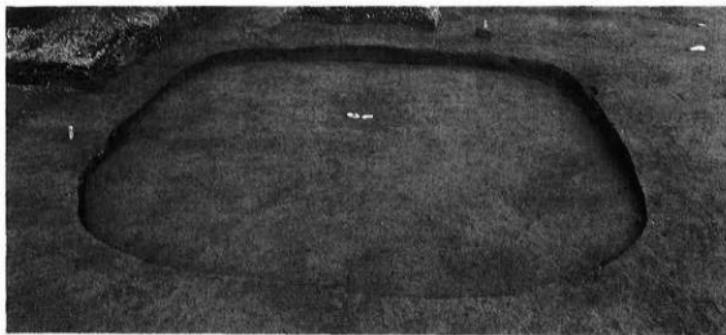
B SB1 遺物出土状況 (南から)



C SB1 №1 出土状況
(南から)

遺構

図版5



A SB2

(南から)



B SB2 墓り方

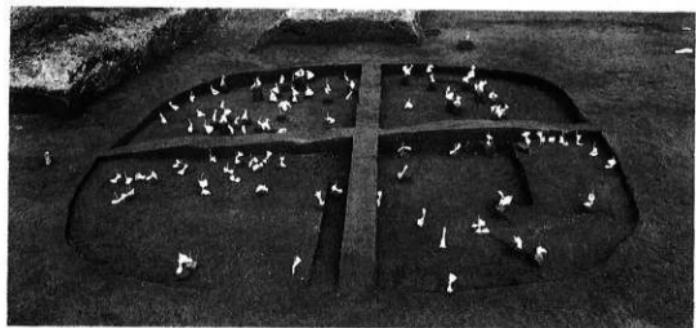
(南から)



C SB2 炉址

(南西から)

図版6 遺構と遺物



A SB2遺物出土状況

(南から)



B SB2 №14出土状況

(南から)



C SB2 №12出土状況
(南から)

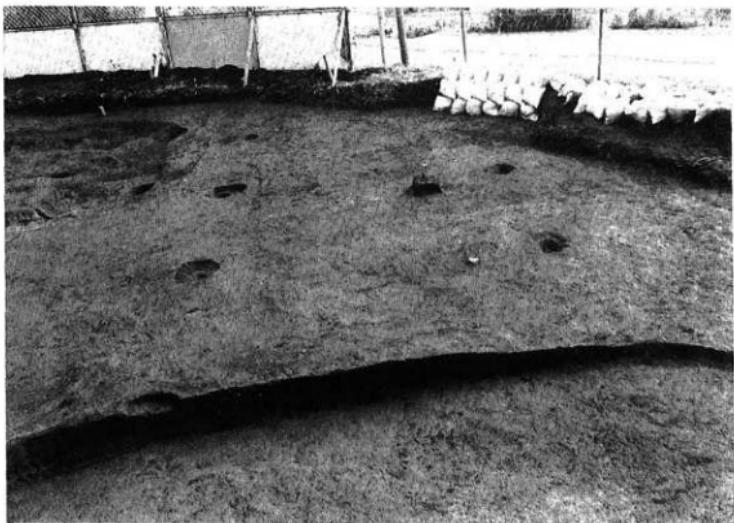
遺 溝

図版7



A SB3、SB4 堀り方

(南西から)



B SB6

(西から)

図版8 遺構

A SB5とSD1
(東から)

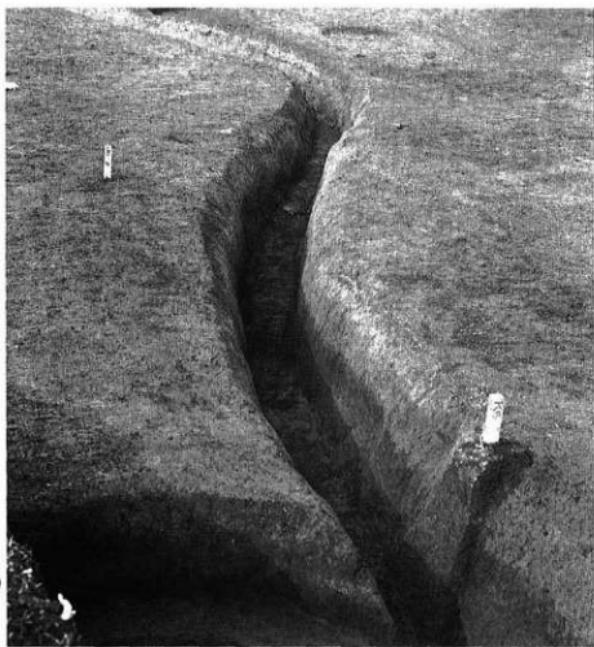


B SB5
(東から)



遺構

図版9



A SD1
(東から)



B SD1 土層
(西から)

図版10 遺構

A SD1
(西から)



B SD2
(東から)

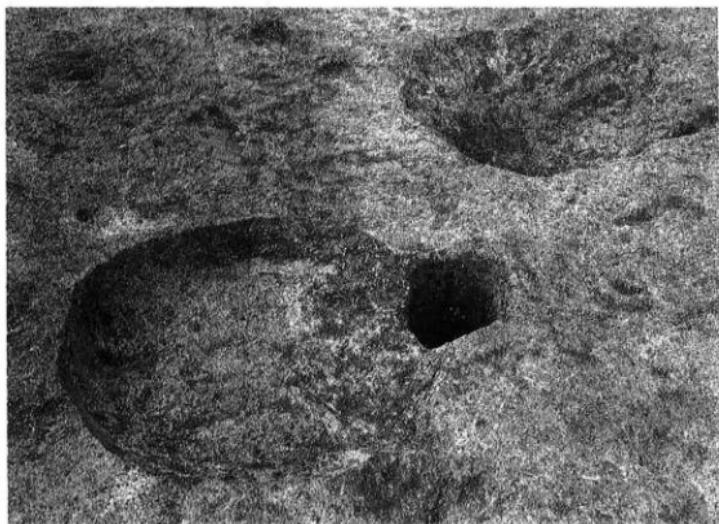


遺構

図版11



A SK4、SK6
SK7、SK8
(東から)



B SK11、SK12、SK13

(南から)

図版12 遺物 SB1出土土器



A No. 1



B No. 6



C No. 7

遺物 SB2、SB5 出土遺物 他

図版13



A No.12



B No.14



C No.18



D No.24, No.34, No.35



E No.20



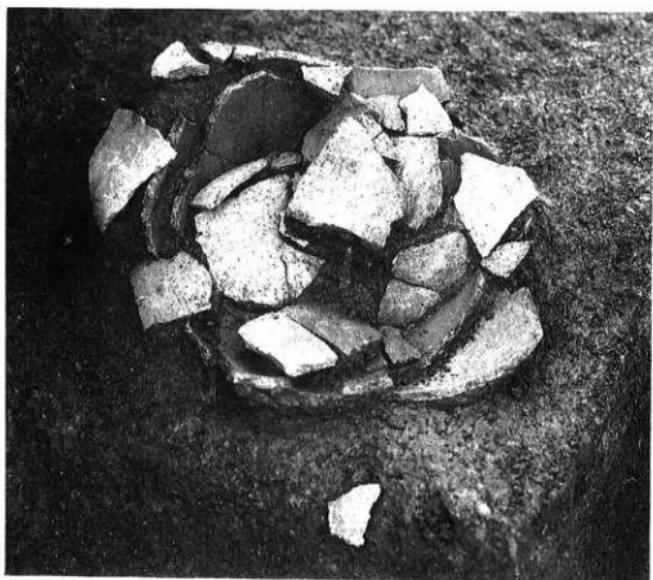
F No.25

図版14



A SB1 №6 出土状況

(南から)



B SB5 №20 出土状況

(東から)